

ジェフリー・オヴ・マンマス

『メルリーヌ伝』 (訳) (1)

六 反 田 収

本稿は十二世紀中葉の作品であるジェフリー・オヴ・マンマス (Geoffrey of Monmouth, c. 1150-54) のラテン詩『メルリーヌ伝』 (*Vita Merlini*) の訳、および註である。

このメルリーヌ (Merlinus) とは、つまり、マーリン (Merlin) ——アーサー王物語の中で“魔法使い”兼“予言者”として特異な働きを示すと共に、その主要不可欠な登場人物の一人ともなっているかの“見者”マーリン——のことであり、ジェフリー・オヴ・マンマスのこの『メルリーヌ伝』は、事実、アーサー王物語の成り立ちとその伝播普及に直接深い関わりを持つ作品である。

英国の一隅に逼塞することを余儀なくされたブリトン人の間に古くから伝わるさまざまな伝説が、それがアーサー王に関係あるなしにかかわらず、他の文学に与えた影響は、今更ながら、まことに驚くべきものがある。それはたんに英文学だけに限らず、広くヨーロッパ文学全体に及び、また時間的にも、中世はおろか、遠く現代にまで脈々と続いている。ここではかりに中世だけに視野を限ってみても、それは十二世紀後半のフランスの詩人クレチャン・ド・トロワ (Chrétien de Troyes) の作品に代表される、いわゆる“ブリトンもの”と称される多くのロマンス、ひいてはこれらフランスの作品に直接その源をあおぐ英国中世の騎士物語のかずかず、またそうした伝説の集大成ともいべきサー・トマス・マロリー (Sir Thomas Malory) の1485年に出版された『アーサー王の死』 (*Le Mortie D'Arthur*) 等々、可憐優美な珠玉的佳篇から雄大鬱然たる

超大作にいたる数多くの名作を産み出させている。しかし、与えた影響の汎ヨーロッパ的規模とその多様性という点でまさに瞠目するに足るこのような文学史の大きな流れも、ジェフリー・オヴ・マンマスなしにはありえなかった。いや、少なくとも、今われわれが見るものとは著しく異なったものとなっていたろうことは、確かである。

実際、本来ウェールズ地方を中心に口承や写本によって伝えられていた、便宜的にアーサー王伝説の名で総称することのできるケルトの伝承に、このような爆発的かつ永続的な国際化のきっかけを与えたのは、ジェフリー・オヴ・マンマスのラテン語による『ブリトン列王史』（*Historia Regum Britanniae*）であった。このことは中世においてラテン語で著述することの意義の大きさを証して余りあるものであるが、われわれはすでにこの作品の中に、予言者であり、またアーサー王の出生と深い関わりを持つ人物としてマーリンが、メルリーヌの名で描かれているのを知るのである。

彼の主著となったこの『ブリトン列王史』を書き続ける一方で、ジェフリー・オヴ・マンマスは『メルリーヌの予言』（*Prophetiae Merlini*）なる小品を著わし、最終的にはこれを前著に組み入れたが、なおその後、それとは別箇に、それを更に拡充し、予言だけでなく、森での暮らしぶりや肉親その他の人々との関わり合いをも描いてこの人物に肉付けを行なった作品を、この度は韻文によって著わした。これがここに取り上げた、詩形を叙事詩に伝統的なヘクサメターにとる、全1529行からなる『メルリーヌ伝』である。

ジェフリー・オヴ・マンマスは、彼自身ウェールズ人であったか、あるいはブルターニュの血をひく人間であったとされ、また1152年にはウェールズのセント・アサフ（St Asaph）の司教に選ばれており、また事実ウェールズ語の Myrddin——これはスコットランド地方に伝わっていた Lailoken がウェールズに入った際に得た名称である——を Merlinus とすることによって Merlin（ないしはそれに類する形）をこの人物の名前として定着させたのも彼であったの

だが、その彼も、面白いことに、ウェールズの伝承を必ずしもよく知っていたわけではなかったらしく、大体この人物をアーサー王と結び付けて、以後のその役割りを規定することになったのも、まったく彼の創意によるものであって、更にこの人物には、本来互いに別箇のものであった、幼なくして大人達を驚かせる程の物知りぶりを示す、いわゆる神童、あるいは怪童をテーマにするものと、人里遠く森の中で暮す狂人 (cf. *V. M.*, l. 80: 'silvester homo') をテーマにする二つの系統の話が同時に持ち込まれている。そのために『ブリトン列王史』ではマーリン二人説としてその矛盾が早くから指摘されている。

もとよりこうしたことに頓着することのない奔放さを持つ“中世人”ジェフリーであるが、『メルリーヌ伝』では、このような前著の歴然とした齟齬は見られず、まとまりを持った興味ある人物像を描き出している。この作品が、ブリトン人の伝える伝承の国際的伝播の過程に照明をあてるものとして、『ブリトン列王史』と共に注目されねばならないことは当然であるが、それと同時に、これが一箇の自立した物語として、更には詩として、立派に読むに足るものであることも、ぜひ付け加えておかなければならない。

メルリーヌの予言の部分、それも特に 580 行から始まるものは、事柄の性質上、理解の行き届かぬ点も多いが、全体にわたって固有名詞等については、できうる限り註において説明を行なった。これらの註をつけるにあたっては、特に『ブリトン列王史』の Lewis Thorpe による英訳本 *Geoffrey of Monmouth: The History of the Kings of Britain* (Penguin Books, 1966) の 'Index' に負うところが多い。またウェールズ語その他全般にわたって、当教室の蜂谷昭雄氏の指摘に多くを学んだ。あわせて深く感謝いたしたい。

テキストは Edmond Faral の *La Légende Arthurienne*, Tome III (Paris, 1929) のリプリント版 (AMS, New York, 1973), pp. 307-52 に拠った。

なお、種々の都合で、(1), (2) の 2 回に分載することにした。(1)は 731 行まで、(2)は残り全て、すなわち、732 行から 1529 行までとなる。

VITA MERLINI

Fatidici vatis rabiem musamque jocosam
 Merlini cantare paro. Tu, corrige carmen,
 Gloria pontificum, calamos moderando, Roberte.
 Scimus enim quia te perfudit nectare sacro
 Philosophia suo fecitque per omnia doctum, 5
 Ut documenta dares, dux et praeceptor in orbe.
 Ergo meis coeptis faveas vatemque tueri
 Auspicio meliore velis quam fecerit alter,
 Cui modo succedis, merito promotus honori.
 Sic etenim mores, sic vita probata genusque 10
 Utilitasque loci, clerus populusque petebant :
 Unde modo felix Lincolnia fertur ad astra.
 Ergo te cuperem complecti carmine digno ;
 Sed non sufficio, licet Orpheus, et Camerinus,
 Et Macer, et Marius magnique Rabirius oris 15
 Ore meo canerent, Musis comitantibus, omnes.
 At vos, consuetae mecum cantare Camenae,
 Propositum cantemus opus cytharamque sonate.

Ergo, peragratis sub multis regibus annis,
 Clarus habebatur Merlinus in orbe Britannus. 20
 Rex erat et vates, Demetarumque superbis
 Jura dabat populis, ducibusque futura canebat.

メルリーヌス伝

運命を語る予言者メルリーヌスの狂気^①と愉快な予言とを
私は歌おう。そなた、司教の栄光たるロベルトゥスよ、
そなたは葦笛を吹き、わが歌のしらべをただし給え。
われらは知る、そなたが世の指導者・教導者として範を示すべく
知恵の女神がおのが聖なるネクタルをふり注ぎ、
そなたをすべての道に通じたる者となし給うたことを。
ゆえに私の企を嘉^{よみ}し給い、前任者にまさる
さらなる庇護の下にこの歌人^{うたびと}を守り給え。
そなたはすぐれた徳のゆえに推挙され、先頃後継ぎとなった。
まことかくあらんことをそなたの人格が、全き生活が、生れが、
それにまた土地の利益が、聖俗すべての者が求めた。
ために今やリンコルニア^③の歓びは天に響いている。
それゆえ私もそなたを相応しい歌で称えんとは願う。
だが私には叶わぬこと。たとえオルベウスが、カメリーヌスが、
はたまたマケルが、マリウスが、大口のラビーリウス^④が、
九人のムーサともども、こぞって私の口で歌おうとも。
だが、汝ら、常に私と共に歌う詩神たちよ、
先に示した事柄を歌おう。汝らは堅琴を弾け。

さて、多くの王の下で多くの歳月が過ぎ去ったのこと、
ブリトン人メルリーヌスは世に賢人と評されていた。
彼は王にして予言者であり、デーメーティア^⑤の傲慢粗暴な
民びとに法を布き、族長達に未来のことを語り聞かせていた。

Contigit interea plures certamen habere
 Inter se regni proceres, belloque feroci
 Insontes populos devastavisse per urbes : 25
 Dux Venedotorum Peredurus bella gerebat
 Contra Guennoloum, Scotiae qui regna regebat.
 Jamque dies aderat bello praefixa, ducesque
 Astabant campo, decertabantque catervae
 Amborum, pariter miseranda caede ruentes. 30
 Venerat ab bellum Merlinus cum Pereduro,
 Rex quoque Cumbrorum Rodarcus, saevus uterque.
 Caedunt obstantes invisis ensibus hostes ;
 Tresque ducis fratres, fratrem per bella secuti,
 Usque rebellantes caedunt perimuntque phalanges : 35
 Inde per infestas cum tali munere turmas
 Acriter irruerant, subito cecidere preempti.
 Hoc viso, Merline, doles tristesque per agmen
 Commisces planctus, tali quoque voce remugis :
 ‹‹Ergone sic potuit sors importuna nocere, 40
 Ut mihi surriperet tantos talesque sodales,
 Quos modo tot reges, tot regna remota timebant ?
 O dubios hominum casus mortemque propinquam,
 Quae penes est illos semper, stimuloque latenti
 Percutit, et miseram pellit de corpore vitam ! 45
 O juvenile decus, quis nunc astitit in armis
 Nunc mihi pone latus mecumque repellit euntes
 In mea damna duces incumbentesque catervas ?
 ››

その間にも王国内の多くの頭領達は
互いに争い合い、恐い戦争によって
罪もない人々を町毎に掠奪し苦しめていた。
ところで、ウェネドーティア^⑥の族長ペレドゥールス^⑦は戦いを
フコーティア^⑧の王国を支配するグウェンノロウス^⑨に挑んでいた。
そして今や運命の定める戦いの日は来て、両将
戦場に立ち、両者の軍勢共に戦い合い、
共に等しく痛ましい殺戮によって倒れた。
メルリーヌスもペレドゥールスと共にこの戦い^⑩に臨み、
また同じく勇猛なクンプリア王ローダルクス^⑪も共にあった。
彼等は憎悪に満ちた剣で立ちふさがる敵兵を斬りすてた。
また戦いには兄につき従う族長の三人の弟達は
向い来る密集軍を続けざまに斬り伏せ、打ち滅ぼした。
ついでまた彼等は敵意を示す軍勢の中に同じ目的で
烈しく突進し、突然に殺され倒れてしまったのだ。
これを見て、メルリーヌスよ、汝は悲しみ、全軍の将兵ともども
悲嘆の声を上げ、呻きながらまたこのように言った。
「さてもかほどに害をなす力を酷くも運命は持っていたのか。
つい先までは多くの王が、多くの遠く離れた王国が恐れていた
これほど多くの、これほどすぐれた同志を奪い去ってしまうとは。
おお、定かならぬ人間の運命よ、近き死よ！
死は常に人間の身近にいて、隠し持った突き棒で
突き刺し、哀れや人の命を肉体から追い出してしまう。
おお、若者の誉れよ、今や誰が武器を執って
わが傍らに立ち、われを討たんと向い来る敵將を、
はたまた襲いかかる敵勢を、われと共に撃退しよう。

Audaces juvenes, vobis audacia vestra
 Eripuit dulces annos dulcemque juventam. 50
 Qui modo per cuneos discurrebatis in armis
 Obstantesque viros prosternebatis ubique,
 Nunc pulsatis humum rubeoque cruore rubetis.》
 Sic inter turmas lacrimis plangebat obortis
 Deflebatque viros. Nec cessant proelia dira; 55
 Concurrunt acies, sternuntur ab hostibus hostes,
 Sanguis ubique fluit, plurimi moriuntur utrimque.
 At tandem Britones, revocatis undique turmis,
 Conveniunt pariter pariterque per arma ruentes
 Invadunt Scotos, prosternunt, vulnera dantes; 60
 Nec requieverunt, donec sua terga dederunt
 Hostiles turmae per devia diffugientes.
 Evocat bello socios Merlinus, et illis
 Praecipit in varia fratres sepelire capella,
 Deplangitque viros, nec cessat fundere fletus. 65
 Pulveribus crines spargit, vestesque recidit,
 Et prostratus humi nunc hac illacque volutat.
 Solatur Peredurus eum, proceresque ducesque,
 Nec vult solari nec verba precantia ferre.
 Jam tribus emensis defleverat ille diebus 70
 Respueratque cibos, tantus dolor usserat illum.
 Inde novas furias, cum tot tantisque querelis
 Aera complisset, cepit, furtimque recedit,
 Et fugit ad silvas, nec vult fugiendo videri,

勇敢な若者よ、汝らの勇敢さが汝らから
 甘美な歳を、甘美な若々しさを奪ったのだ。
 つい先までは武器を執って敵陣内を駆けめぐり、
 行く手を阻む子どもを随処に打ち倒していた者が
 今や地面を打ち、朱の血潮あけに赤く染まっている。」

このように彼は軍勢の中であって涙もせきあえず悲嘆し、
 勇者の死を悼んだ。しかし烈しい戦闘はいまだ止まず、
 前衛は前衛とぶつかり合い、敵は相対する敵に倒され、
 血潮はいたる処に流れ、双方共に多くの者が戦死した。
 しかし遂にブリトン軍は軍勢を四方から呼び集め、
 一つにまとまり、一つになって武器の間を突き進んで
 スコーティア軍に襲いかかり、手傷を負わせてこれを打ち倒した。
 しかしなお、敵勢が背を向け、道なき道を算を乱して
 逃げ出すまでは、攻撃の手をやすめはしなかった。
 メルリーヌスは味方を戦闘から呼び集め、彼等に
 兄弟達を各々それぞれの廟に葬ることを命じ、
 これら勇者の死を嘆いて涙を流すことをやめなかった。
 彼は髪に塵を撒き、服を裂き、
 地に伏して、あちこちとまろび身もだえた。^⑬
 ペレドールスも、また他の族長や頭領達も、彼を慰めたが、
 慰められようとも、懇願の言葉を聞き入れようともしなかった。
 すでに三日が過ぎててもまだ彼は嘆き暮らし、
 食事を拒けていた。それほど悲しみが彼を苦しめていたのだ。
 このように多くの深い嘆きの声であたりの空気を満していると、
 またも狂気に襲われ、ひそかに彼は人々から身を遠去け、
 森へ向かって逃げたが、逃げる途中も人目を避け、

Ingrediturque nemus, gaudetque latere sub ornis, 75
 Miraturque feras pascentes gramina saltus.
 Nunc has insequitur, nunc cursu praeterit illas ;
 Utitur herbarum radicibus, utitur herbis,
 Utitur arboreo fructu morisque rubeti.
 Fit silvester homo, quasi silvis editus esset. 80
 Inde per aestatem totam, nullique repertus,
 Oblitusque sui cognatorumque suorum,
 Delituit silvis obductus more ferino.
 At, cum venit hiems, herbasque tulisset et omnes
 Arboreos fructus, nec quo frueretur haberet, 85
 Diffudit tales miseranda voce querelas :
 《Caeli Christe deus, quid agam? qua parte morari
 Terrarum potero, cum nil quo vescar adesse
 Inspicio, nec gramen humi, nec in arbore glandes?
 Tres quater et juges septenae poma ferentes 90
 Hic steterant mali: nunc non stant. Ergo quis illas,
 Quis mihi surripuit? Quo devenere repente?
 Nunc illas video, nunc non. Sic fata repugnant,
 Sic quoque recordant, cum dant prohibentque videre.
 Deficiunt nunc poma mihi, nunc cetera quaeque. 95
 Stat sine fronde nemus, sine fructu. Plector utroque,
 Cum neque fronde tegi valeo, neque fructibus ūti.
 Singula bruma tulit pluviisque cadentibus auster.
 Invenio si forte napes tellure sub ima,
 Concurrunt avidaeque sues aprique voraces, 100

森に分け入り、喜んでななかまどの根かたに身をひそめ、
獣たちが森の空地に草をはむさまに見惚れていた。
ときには獣たちを追い掛けたり、追い抜いたりもし、
喜んで草の根を食べ、草の葉や茎を食べ、
木の実や蕨の実を食べた。
まるで森で生れたかのように森の住人となったのだ。
ついで、夏の間中、誰に見つかることもなく、
われを忘れ、肉親縁者を忘れて、
野獣のように森に隠れひそんでいた。
しかし、冬が来て、草を奪い、またすべての
木の実を奪い、楽しみとするものもなくなると、
哀れな声でこう不満を述べ立てた。

「天主たるキリストよ、^⑭ どうすればよいのです。この地上の
どこに私はいられるのです。食べるものと何一つなく、
地には草も、木には実とても見あたらぬ今は。
十二と七本の若々しい林檎の木が実を結ばせて^⑮
かつてはここに立っていた。なのに今はない。では誰がそれを、
誰が私から奪ったのです。何処へ突然行ってしまったのです。
今見えていて、今は見えない。このように運命が私に逆らい、
このようにまた心に留めて、見えたりも見えなくもしている。
今や私には林檎もなく、他の何物もない。
森は葉もなく実もなく立っている。これは二つながら災難で、
私は葉で身を覆うことも、実を食べることもできない。
その一つ一つを冬が奪い、雨を降らす南風が奪った。
たまたま地中に深くかぶら蕪を見つけても、
貪欲な野豚や貪婪な猪たちが駆け寄って来て、

Eripiuntque napes mihi quas de cespite vello.

Tu, lupe care comes, nemorum qui devia mecum

Et saltus peragrare soles, vix praeteris arva :

Et te dura fames et me languere coegit.

Tu prior has silvas coluisti, te prior aetas 105

Protulit in canos, nec habes, nec scis quid in ore

Projicias. Quod miror ego, cum saltus abundet

Tot capreis aliisque feris, quas prendere posses.

Forsitan ipsa tibi tua detestanda senectus

Eripuit nervos cursumque negavit habendum. 110

Quod solum superest, completes ululatibus auras,

At resupinus humi consumptos dejicis artus.》

Haec inter frutices coriletaque densa canebat,

Cum sonus ad quemdam pervenit praetereuntem,

Qui direxit iter quo sermo loquentis in auras 115

Exierat, reperitque locum, reperitque loquentem.

Quo viso, Merlinus abit, sequiturque viator,

Nec detinere virum potuit sic diffugientem.

Inde viator iter repetit quo coeperat ire,

Propositumque tenet casu commotus euntis. 120

Ecce viatori venit obvius alter ab aula

Rodarchi, regis Cumbrorum, qui Ganiedam

Duxerat uxorem, formosa conjuge felix.

Merlini soror ista fuit casumque dolebat

Fratris, et ad silvas et ad arva remota clientes 125

Miserat, ut fratrem revocarent. Ex quibus unus

土から引き抜いたその^{かぶら}蕪を私の手から奪い取ってしまう。
 愛する友の^⑩狼よ、いつも私と共に人の通らぬ森の中や
 森の空地をさまよひ、耕地には滅多に近寄ることのない狼よ、
 お前も、また私も、激しい飢えが力を弱らせてきた。
 お前は先にこの森に住み、お前を先に歳の数
 白髪にかえたが、そのお前が口に入れるべきものを持たず、
 また何を口に入れるべきかも知らない。森の空地にはあれほど多く
 お前の恰好の餌食となる山羊や獣がいながら、不思議なことだ。
 恐らくは他ならぬお前のそのいとわしい年嵩が
 力を奪い、駆けることを許さぬのだ。
 今はただ遠吠えの響きであたりの空気を満すばかりで、
 だらしく寝そべり、疲れた手足を地面に投げ出している。」

このようにさまざまな灌木や^{はしばみ}榛の繁みの中で声を響かせていると、
 その声がそばを通りかかったある男の耳にとどいた。

男は人の語る言葉の聞こえて来る方へと
 道を取り、その声の出処を見つけ、語り手を見つけた。
 この男を見るとメルリーヌはそこを離れ、旅人は後を追ったが、
 このようにして逃げ出した男を引き止めることはできなかった。
 そこで旅人は道を再び最初に向かっていた方へととり、
 この出来事はなお気掛りではあったが、旅の計画に従った。

見よ、向うから別な旅人がやって来た。これは
 ガニエ^⑪ダを妻にめとり、美しい妻に満足していた
 クンプリアの王ローダルクスの王宮から来た男であった。
 このガニエダはメルリーヌの妹で、兄のことを
 悲しみ、それで兄を呼び戻そうと家来達を
 遠くの森や野に遣わしていたが、それでその内の一人が

Obvius huic ibat, sed et hic sibi protinus ergo.
 Convenere simul, commiscent mutua verba.
 At qui missus erat Merlinum quaerere quaerit
 Si vidisset eum silvis aut saltibus alter. 130
 Ille virum talem se conspexisse fatetur
 Inter dumosos saltus nemoris Calidonis,
 Dumque loqui vellet secum secumque sedere,
 Diffugisse virum celeri per robora cursu.
 Haec ait. Alter abit, silvasque subintrat, et imas 135
 Scrutatur valles, montesque quoque praeterit altos;
 Quaerit ubique virum gradiens per opaca locorum.
 Fons erat in summo cujusdam vertice montis
 Undique praecinctus corulis densusque fructectis.
 Illic Merlinus consederat: inde per omnes 140
 Spectabat silvas cursusque jocosque ferarum.
 Nuntius hunc scandit tacitoque per ardua gressu
 Incedit, quaerendo virum. Tum denique fontem
 Merlinumque videt super herbas pone sedentem
 Dicentemque suas tali sermone querelas: 145
 《O qui cuncta regis, quid est cur contigit ut non
 Tempora sint eadem numeris distincta quaternis?
 Nunc ver jure suo flores frondesque ministrat;
 Dat fruges aestas; autumnus mitia poma;
 Consequitur glacialis hiems et cetera quaeque 150
 Devorat et vastat, pluviasque nivesque reportat:
 Singula quaeque suis arcet laeditque procellis,

こちらに、いや、あれはという間にもうここに来ていたのだ。
二人の旅人は出会い、互いに挨拶の言葉を交わした。
だが更に、メルリーヌスを尋ねるべく遣わされた男は、
森か森の空地でメルリーヌスを見なかったかと尋ねた。
相手が言うには、カリドーンの森^⑯の灌木の生い繁る
空地の中でそのような男を見かけはしたが、
共に語り、共に腰を下ろしてほしいものだと思っている内に、
櫛の木^⑰の森にすばやく駆け込み、逃げてしまった、
とそう話した。第二の旅人はそこを離れ、森に入り、また
深い谷を隅なく探し、それにまた高い山々をも踏み越え、
ほの暗い場所をいたる処探しまわった。

とある山の頂に泉があって、
周囲を榛^{はしばみ}や他の灌木の深い繁みにかこまれていた。
そこにメルリーヌスは坐り、そこからまわりの森に
獣たちが駆けたり、戯れ合っているさまを眺めていた。
使いの者はこの山に登り、足音を忍ばせて急な坂を
男の姿を求めながら進んだ。すると遂に泉と、
草の上に向うむきに坐ってこのような言葉で
悲しみ嘆いているメルリーヌスを見た。

「おお、すべてを支配なさるお方よ、どのような理由で
季節は同じように四つに分けられはしなかったのです。
春は当然のこととして花と繁り葉を与え、
夏は稔りを、秋は熟れた果実をもたらす。
次ぎには凍てつく冬が続き、他のすべてを
滅ぼし、荒廃させ、雨と雪とを持ち帰って来る。
烈しい嵐ですべてを遠去け、痛めつけ、

Nec permittit humum varios producere flores,
 Aut quercus glandes, aut malos punica mala.
 O utinam non esset hiems aut cana pruina, 155
 Ver foret aut aestas, cuculusque canendo rediret,
 Et philomena, pio quae tristia pectora cantu
 Mitigat, et turtur conservans foedera casta,
 Frondibus inque novis concordi voce volucres
 Cantarent aliae, quae me modulando foverent, 160
 Dum nova flore novo tellus spiraret odorem,
 Gramine sub viridi, levi quoque murmure fontes
 Diffluerent, juxtaque daret sub fronde columba
 Somniferos gemitus irritaretque soporem!》
 Nuntius audierat vatem, rupitque querelas 165
 Cum modulis citharae, quam gesserat ultro,
 Ut sic deciperet demulceretque furentem.
 Ergo movens querulas digitis et in ordine cordas,
 Talia pone latens dimissa voce canebat :
 《O diros gemitus lugubris Guendoloenae! 170
 O miseras lacrimas lacrimantis Guendoloenae!
 Me miseret miserae morientis Guendoloenae!
 Non erat in Waliis mulier formosior illa :
 Vincebat candore deas foliumque ligustri
 Vernantesque rosas et olentia lilia prati; 175
 Gloria vernalis sola radiabat in illa,
 Sidereumque decus geminis gestabat ocellis
 Insignesque comas auri fulgore nitentes.

大地が種々様々な花を生み出すことを許さず、
 榎が榎の実を、柘榴が柘榴の実をつけることも許しはしない。
 ああ、冬や白霜などなければよいものを！
 それが春か夏であれば、郭公は歌いながら戻って来て、
 また優しい歌で悲しい心を和らげる
ナイティンゲール
 夜鳴鶯や貞節の誓いを守る雉鳩も来て、
 その他の鳥たちも皆若葉の間で声を揃えて
 鳴き、その歌の調べで私を暖かく抱きしめてくれようし、
 一方、緑の草に覆われた若やいだ大地は
 若々しい花の香りを漂わせ、泉は低く囁きながら
 流れ、傍らの葉蔭では鳩が眠りを誘う呻き声を
 あげて、その声で深い眠りをかき立ててくれようものを！」

使いの者は予言者の言葉を聞き、自ら携え持った
 琴の調べで彼の嘆きをさえぎり、そうすることで
 彼の心を奪い去って、彼の激情を鎮めようとした。
 そこで順々に悲しげな弦を指でかき鳴らし、
 後ろに身を隠したまま、こう低い声で歌った。

「ああ、憂いに沈むグウェンドロエーナの恐るべき呻き声！
 ああ、泣き濡れるグウェンドロエーナの哀れな涙よ！
 あわや息絶えんとする哀れなグウェンドロエーナこそ哀れなれ！
 ワリアエには彼女ほどに美しい女はかつてなく、
 その輝きは諸々の女神にも、水蠟いぼたの花弁はなびらにもまさり、
 咲き誇る薔薇にも、野に匂う百合にもまさっていた。
 春の栄光は彼女一人に輝きを放ち、
 両の眼は星の美しさをたたえ、
 髪は黄金の煌めきに光り輝いていた。

Hoc totum periit, periit decor omnis in illa,
 Et color, et facies, niveae quoque gloria carnis. 180
 Non est quod fuerat, multis moeroribus acta.
 Nescit enim quo dux abiit, vitane fruatur
 An sit defunctus. Languet miserabilis inde
 Totaque deperiit longo liquefacta dolore.
 Collacrimatur ei paribus Ganieda querelis, 185
 Amissumque dolet sine consolamine fratrem.
 Haec fratrem flet, et illa virum; communiter ambae
 Fletibus incumbunt et tristia tempora ducunt.
 Non cibus ullus eis; nec sommus nocte vagantes
 Sub virgulta fovet: tantus dolor ardet utramque. 190
 Non secus indoluit Sidonia Dido, solutis
 Classibus Aeneae, tunc cum properaret abire;
 Cum non Demophoon per tempora pacta rediret,
 Taliter ingemuit flevitque miserrima Phillis;
 Briseis absentem sic deploravit Achillem. 195
 Sic soror et conjux collamentantur et ardent,
 Funditus internis cruciatibus usque dolendo.》
 In fidibus querulis dicebat talia cantans
 Nuntius et modulo vatis demulserat aures,
 Mitior ut fieret congauderetque canenti. 200
 Ocius assurgit vates, juvenemque jocosus
 Affatur verbis, iterumque movere precatur
 Cum digitis cordas elegosque sonare priores.
 Admoveret ille lyrae digitos, jussumque reformat

それがみな、すべての美しさが、今や消えてしまった——
 色艶も、容かんばせも、雪のような肌はだえの輝きもみな。
 あまりの悲しみに追い出され、かつての美貌は今はない。
 まこと主人の行方も知らず、生きているものやも、
 すでに亡き者やも知らず、ために見る影もなく寝れはて、
 長い間の悲しみに痩せ衰えてしまっている。
 同じ悲しみにガニエーダも彼女と涙を共にし、
 兄の不在を慰めようもなく嘆いている。
 一人は兄ゆえに、一人は夫ゆえに泣き、二人共に
 ひたすら涙に身をまかせ、悲しい日々を送っている。
 食べ物とて何一つ口にせず、また夜は繁みをさまよう彼女らを
 眠りが抱きしめてはくれない。それほどに二人の悲しみは大きいのだ。
 カルターゴのディードーは、アテネーアースの船隊が錨を上げて
 急ぎ立ち去ったとき、まさにかくの如く悲しんだのであったし、
 デーモポオンが約束の期限に戻って来なかったとき
 見るも哀れにピュルリスはかくも呻きながら涙を流し、
 ブリーセイスは失ったアキッレウスをかくも激しく嘆いた。[㊤]
 それほどに妹も妻も共に泣き悲しみ、
 胸の激しい痛みに絶える間もなく苦しんでいる。」

悲しげな琴に合わせて使いの者はこのように
 歌い、美しい旋律で予言者の耳を撫でて、
 彼が心を和らげ、歌い手に好意を抱くようにしむけた。
 直ぐさま予言者は立ち上がり、この若者に愛想よい
 言葉で語り掛け、今一度指で弦をかき鳴らして
 先ほどの哀歌エレジーを歌ってくれるように頼んだ。
 若者は琴に指を当て、命じられた歌を再び

Carmen, item cogitque virum modulando furorem 205
 Ponere paulatim, citharae dulcedine captum.
 Fit memor ergo sui, recoliturque quod esse solebat
 Merlinus, furiasque suas miratur et odit.
 Pristina mens rediit, rediit quoque sensus in illo,
 Et gemit ad nomen, motus pietate, sororis 210
 Uxorisque simul, mentis ratione recepta,
 Conduciturque petit Rodarchi regis ad aulam.
 Paruit alter ei, silvasque subinde relinquunt,
 Et veniunt pariter laetantes regis in urbem.

Ergo fratre suo gaudet regina recepto, 215
 Proque sui reditu fit conjux laeta mariti,
 Oscula certatim geminans, et brachia circum
 Colla viri flectunt, tanta pietate moventur.
 Rex quoque, quo decuit, reducem suscepit honore;
 Totaque turba domus, proceres laetantur in urbe. 220

At postquam tantas hominum Merlinus adesse
 Inspexit turmas nec eas perferre valeret,
 Cepit enim furias, iterumque furore repletus
 Ad nemus ire cupit, furtimque recedere quaerit.
 Tunc praecepit eum posito custode teneri 225
 Rodarchus citharaque suos mulcere furores,
 Astabatque dolens, verbisque precantibus illum
 Orabat ratione frui secumque manere,
 Nec captare nemus, nec vivere more ferino

弾いて、今やすでに琴の甘美さの虜となった彼に、更にまた歌の調べで少しづつ狂気を捨て去るよう強いたのだ。それでメルリーヌはわれに帰り、かつての自分を思い出し、己れの狂いように驚き、また嫌悪した。以前の知性も戻り、また感情も戻って来て、今や理性を取り戻した彼は、憐憫の情に動かされ、妹の名を聞き、また妻の名を聞く度に呻き声を上げ、ローダルクス王の宮殿に案内してくれるようにと請うた。相手はその願いを容れ、直ぐに二人は森を捨てて、共に喜びながら王のいる町へ向かったのだった。

さて、兄が戻って来たことを妹は喜び、また妻も夫の帰りに明るさを取り戻し、二人は争って口付けを重ね、両腕を彼の首のまわりにまわした。それほど愛情を二人は抱いていたのだ。王もまた相応しい栄誉をもって彼の帰還を迎え、王宮内のすべての者も、町の重立った面々も、皆喜び合った。

しかしメルリーヌは非常に多くの人間を間近に見て、その人の多さに耐えきれなくなると、実際狂気に襲われ、再び激情に満されて、森へ行くことを願い、ひそかに出て行こうとした。それでローダルクスは、番人を置いて彼を引き止め、琴の音で彼の激情を和らげるようにと命令し、彼のもとに来て悲しげに懇願して言うには、どうか理性を働かして一緒にいてくれるように、王位に即いて狂暴な民びとに法を行なうことが

- Velle sub arboribus, dum regia scepra tenere 230
 Posset et in populos jus exercere feroces.
 Hinc promittit ei se plurima dona daturum,
 Afferique jubet vestes, volucresque, canesque,
 Quadrupedesque citos, aurum, gemmasque micantes,
 Pocula quae sculpsit Guielandus in urbe Sigeni: 235
 Singula praetendit vati Rodarchus et offert,
 Et monet ut maneat secum silvasque relinquat.
 Talia respondens spernebat munera vates:
 〈Ista duces habeant sua, quos confundit egestas,
 Nec sunt contenti modico, sed maxima captant. 240
 His nemus et patulas Calidonis praefero quercus,
 Et montes celsos subtus virentia prata:
 Illa mihi, non ista placent. Tu talia tecum,
 Rex Rodarche, feras: meas me Calidonis habebit
 Silva ferax nucibus, quam cunctis praefero rebus.〉 245
 Denique, cum nullo potuisset munere tristem
 Rex retinere virum, forti vincire catena
 Jussit, ne peteret nemorum deserta solutus.
 Ergo, cum sensit circum se vincula vates,
 Nec liber poterat silvas Calidonis adire, 250
 Protinus indoluit, tristisque tacensque remansit,
 Laetitiamque suis subtraxit vultibus omnem,
 Ut non proferret verbum risumque moveret.
 Interea visura ducem regina per aulam
 Ibat et, ut decuit, rex applaudebat eunti, 255

できる限りは森へ行こうなどはせず、獣のように
樹の下で暮そうなどと考えないでほしいと頼んだ。
今この場で多くの贈物を与えようと彼は約束し、
命令を下して衣服や、鳥や、犬や、
足の疾い四足獣や、黄金や、輝く宝石や、
シゲーニー[㊦]の町のグウィエランドゥス[㊧]の彫った酒杯を運ばせた。
その一つ一つをローダルクスは予言者の前に拡げて勧め、
王のもとにとどまって森を捨てるようにと説いた。
それに予言者はこう答えて贈物を断った。
「それらは不足に悩み、僅かのものでは満足せず、
最も多きを願う歴々がわがものとするがよいのだ。
私にはカリドーンの森の枝葉を上げた樅の木や、
高く聳え立つ山の麓に広がる緑の牧場の方がいい。
私が好むのはそれで、これらではない。こうしたものは、
ローダルクス王よ、ご自分の手に収めてほしい。私のものは
私が何より好む、木の実豊かなカリドーンの森が持っていよう。」
遂にはどのような贈物によってもこの悲しんでいる男を
引き止めることはできず、王は命じて彼を頑丈な鎖で縛らせ、
自由に人里離れた森に逃げ出せぬようにした。
それで予言者は、体のまわりに縛めを受け、
最早自由の身でカリドーンの森へは行けないことを知ると、
悲しみ嘆き、不興げに黙りこくってしまい、
顔の表情から喜びの色をすべて取り去り、
言葉も口にせず、また笑うこともしなかった。

一方、王妃は宮殿の中を殿に会いに
行った。すると王は相応しい礼をはらって迎え入れ、

Perque manum suscepit eam, jussitque sedere,
 Et dabat amplexus, et ad oscula labra premebat ;
 Convertensque suos in eam per talia vultus,
 Vidit in illius folium pendere capillis.
 Ergo suos digitos admovit, et abstrahit illud, 260
 Et projecit humi, laetusque jocatur amanti.
 Flexit ad hoc oculos vates, risumque resolvit,
 Astantesque viros fecit convertere vultus,
 In se mirantes quoniam ridere negarat,
 Rex quoque miratur percunctaturque furentem 265
 Tam subito facti causas edicere risus,
 Adjecitque suis donaria plurima verbis.
 Ille tacet, differtque suos exponere risus ;
 At magis atque magis pretio precibusque movere
 Instabat Rodarchus eum. Tum denique vates 270
 Indignatus ei pro munere talia fatur :
 <Munus avarus amat, cupidusque laborat habere :
 Hi faciles animos flectunt quocumque jubentur
 Munere corrupti. Quod habent non sufficit illis :
 At mihi sufficiunt glandes Calidonis amoenae 275
 Et nitidi fontes per olentia prata fluentes.
 Munere non capior : sua munera tollat avarus ;
 Et nisi libertas detur repetamque virentes
 Silvarum valles, risus aperire negabo.>
 Ergo cum nullo potuisset munere vatem 280
 Flectere Rodarchus nec cur risisset haberet,

彼女の手を取って坐るように勧め、
抱擁し、美しい口に唇を押し当てた。
そうこうしながら目を彼女に向けると、
彼女の髪に一枚の木の葉が付いているのを見た。
それで指を持って行ってそれを取り去り、
床に捨てて愛する妻と陽気に戯れた。
この様子に目を向けると予言者は笑いを発し、
これまで何故笑わぬのかと互いに不思議がっていた
近くにいた者達の目を彼の方に向けさせた。
王もまた驚いて、このように不意になされた笑いの理由を
狂った彼に明らかにするように問い、
更には多くの贈物をその言葉に付け添えた。
彼は沈黙し、自分の笑いを説明しようとはしなかった。
しかし更に一層の報酬と懇願とで彼を動かそうと
ローダルクスはし続けた。それで遂に予言者は
その贈物に腹を立て、王にたいしてこう言った。
「贈物は貪欲家が好み、欲深者が求めるものだ。
彼等は贈物に誘惑され、命令されれば何事にも
容易に従ってしまう。現在持てるものに満足しないのだ。
だが私には魅力的なカリドーンの木の実と
花香る草地を流れる清らかな泉の水で十分だ。
贈物で私は籠絡されはしない。贈物は貪欲な者が受けるがいい。
もしも自由が与えられて、再び森の緑なす谷間に
戻れるのでなければ、笑いを説明することは断りたい。」
それでどのような贈物によっても予言者の決心を変えることは
できず、また何故笑ったのかも聞き出せなかったために、

Confestim sua vincla viro dissolvere jussit,
 Datque potestatem nemorum deserta petendi,
 Ut velit optatam risus expromere causam.
 Tunc Merlinus ait gaudens, quia possit abire : 285
 ‹Idcirco risi quoniam, Rodarche, fuisti
 Facto culpandus simul et laudandus eodem,
 Dum traheres folium modo, quod regina capillis
 Nescia gestabat, fieresque fidelior illi
 Quam fuit illa tibi, quando virgulta subivit, 290
 Quo suus occurrit secumque coivit adulter ;
 Dumque supina foret, sparsis in crinibus haesit
 Forte jacens folium, quod nescius eripuisti.›
 Ergo super tali Rodarchus crimine tristis
 Fit subito, vultumque suum divertit ab illa, 295
 Damnabatque diem qua se conjunxerat illi.
 Mota sed illa nihil vultu ridente pudorem
 Celat et alloquitur tali sermone maritum :
 ‹Cur tristaris, amans? Cur sic irasceris ab re,
 Meque nec ex merito damnas, credisque furenti, 300
 Qui ratione carens miscet mendacia veris?
 Multotiens qui credit ei fit stultior illo.
 Excipe nunc igitur : ne sim decepta, probabo
 Quod sit delirus, quod non sit vera locutus.›
 Ut plures alii, fuerat puer unus in aula. 305
 Hunc cum prospiceret, convolvit protinus artem
 Ingeniosa novam, qua vult convincere fratrem.

ローダルクスは直ちに彼の縛めを解くよう命令し、
人気のない淋しい森に行く許可を彼に与えて、
求める笑いの理由を述べる気にさせようとした。
するとメルリーヌスは出て行けることを喜んでこう言った。
「私が笑った訳は、ローダルクスよ、あなたが
同じ行為によって罪に値すると同時に賞讃に値したためだ。
あなたは今しがた王妃が知らずに髪に付けていた
木の葉を取り去って、あなたの彼女にたいする誠実さが、
繁みに入ってそこで間男と会って交わった際の
彼女のあなたにたいする誠実さに優ることを示した。
仰向けに伏したとき、彼女の解かれた髪に
たまたま一枚の落葉が付き、それを知らずにあなたは取り払ったのだ。」

さて、このような告発を聞くとローダルクスは
急に不気嫌になり、彼女から顔をそむけ、
彼女を妻に迎えた日を呪った。
動揺はしたものの、彼女は決して笑わぬ顔に恥じらいを
隠して、このような言葉で夫に話し掛けた。

「まああなた、何故お悲しみです。何故これでこうもお怒りになり、
いわれもなく私を咎めて、気違いの言葉を信用なさるのです。
理性を欠き、^{まこと}真と偽りとを混同している者の言うことです。
もう幾度となく彼を信じた者が彼以上の物笑いとなっております。
ですから、さあ、お聞き下さい。私の目に狂いがなければ、
彼は錯乱していて、真実を語ったのではないことを証明いたしましょう。」
この宮殿に他の多くに混じってある一人の小姓がいた。
彼女はこの小姓の姿を認めると、即座に新しい策略を
気転よくめぐらし、兄をやり込めようと考えた。

Inde venire jubet puerum, fratremque precatur,
 Qua moriturus erit, pueri praedicere mortem.
 Ergo frater ei : 《Soror o carissima, dixit, 310
 Hic morietur homo de celsa rupe ruendo.》
 Illa sub haec ridens puero praecepit abire
 Et, quibus indutus fuerat, deponere vestes,
 Et vestire novas, longosque recidere crines,
 Sicque redire jubet, ut eis appareat alter. 315
 Paruit ergo puer : rediit nam talis ad illos,
 Qualis erat jussus mutata veste redire.
 Mox iterum fratrem regina precatur et infit :
 《Quae mors hujus erit narra dilectae sorori.》
 Tunc Merlinus ait : 《Puer hic, cum venerit aetas, 320
 Mente vagans forti succumbet in arbore morti.》
 Dixerat. Illa suum sic est affata maritum :
 《Siccine te potuit falsus pervertere vates,
 Ut crimen tantum me commisisse putares ?
 At, si scire velis, qua sit ratione locutus 325
 Hoc nunc de puero, censebis ficta fuisse
 Quae de me dixit, dum silvas possit adire.
 Absit ut hoc faciam ! Castum servabo cubile,
 Castaque semper ero, dum flabit spiritus in me.
 Illum convici pueri de morte rogatum ; 330
 Nunc quoque convincam ; tu sedulus arbiter esto.》
 Haec ait et tacite puerum secedere jussit,
 Vestesque feminea vestiri, sicque redire.

そこでその小姓に進み出るよう命令し、兄に向かって
彼がどのようにして死ぬか、彼の死を予言するよう請うた。
それで兄は彼女にたいして「おお、最愛の妹よ」と言い、
「この男は高い崖から落ちて死ぬであろう」と言った。
彼女はこの言葉を聞くと笑いながら、小姓にさがるように、
そしてまた、着ていた服を脱ぎ捨てて、
新しい服を付け、長い髪も短く切って、
別人のなりで再び戻って来るようにと命じた。
それで小姓は命令に従い、実際言われた通りに
服装を変え、また彼等の所に戻って来た。
直ぐまた王妃は兄に懇願し、こう言った。

「この者の死がいかなるものか、あなたの愛する妹に話して下さい。」
するとメルリーヌスは言った。「この少年は、成人した暁に
気まぐれを起こし、頑丈な木に下がって死に屈するであろう」と。
彼がそう言うと、彼女は夫にこう語り掛けた。

「私があのような罪を犯したとお考えになるほどに
あなたを惑わす力をこの嘘つき予言者は持っていたのでしょうか。
でも、彼がどれほど理性的にこの小姓について語ったかを
あなたに知る気がおありなら、私について言ったことが
森へ行けるようにするための作り事だったとお認めでしょう。
私がこんなことをするなんて！ 私は貞節な臥床を守り、
命ある限りいつも私は貞節な妻でありましょう。
私はこの小姓の死について問うことで彼をやり込めたのです。
さあ、またやり込めて見せましょう。注意深い判者とおなり下さい。」
こう言うと、また小姓にたいして、黙って引きさがり、
女の服を着て、その姿のまま戻って来るよう命じた。

Mox puer abscessit, jussumque perinde peregit,
 Et sub feminea rediit quasi femina veste, 335
 Et stetit ante virum, cui sic regina jocando :
 〈Eia, frater, ait : dic mortem virginis hujus.〉
 —〈Haec virgo, necne dixit, morietur in amne.〉
 Frater ei movitque sua ratione cachinnum
 Regi Rodarcho, quoniam, de morte rogatus 340
 Unius pueri, tres dixerat esse futuras.
 Ergo putabat eum de conjuge falsa locutum,
 Nec credebat ei, sed contristatur et odit,
 Quod sibi crediderat, quod condemnarat amantem.
 Id regina videns veniam dat, et oscula jungit, 345
 Et blanditur ei, laetum quoque reddidit illum.
 Cogitat interea silvas Merlinus adire,
 Egressusque domum portas aperire jubebat ;
 Sed soror obstabat lacrimisque rogabat abortis
 Ut secum remaneret adhuc tollatque furorem. 350
 Improbis illis suis non vult desistere coeptis,
 Sed perstat reserare fores, et abire laborat,
 Et fremit, et pugnat, famulosque fremendo coartat.
 Denique, cum nullus posset retinere volentem
 Ire virum, jussit citius regina venire 355
 Ejus ad abcessum absentem Guendoloenam.
 Illa venit supplexque virum remanere precatur.
 Spernit at ille preces, nec vult remanere, nec illam,
 Sicut erat solitus, gaudenti cernere vultu.

直ぐに小姓は退出し、言い付けに従い、
女さながらに女の服を纏って戻って来て、
メルリーヌの前に立った。王妃は彼に浮かれた調子で
「さあ、兄上よ、この乙女の死を予言して下さい」と言った。
「この乙女は」とばかりか、更には「河で死ぬであろう」と
兄は彼女に言い、そう答えた彼の理性のありように
ローダルクス王はつい大笑いした。何故ならば、一人の小姓の
死を問われて、三つの未来を彼が語ったからであったのだ。
それ故、王は彼が妻について偽りを語ったものと考え、
彼の言葉を信用せず、それまで十分信用しきっていたことを、
そして愛する妻を責めたことを悲しみ、嫌悪した。
それを見た王妃は赦しを与え、口付けをし、
うまく気嫌をとってまた再び彼を陽気にした。
一方、メルリーヌは森へ行こうと考え、
館を出て、門を開けるよう命令した。
しかし妹は立ち塞がり、徒な涙を流しながら、
まだここにいて乱心を治めるようにと頼んだ。
彼は頑として計画を止めようとはせず、
あくまで門を開けて出て行こうとして、
唸り、押し退け、召使い達に唸り声で開門を迫った。
遂にもう誰も出て行こうとする彼を引き止めることができなくなると、王妃は他の場所にいたグウェンドロエーナに
すでに立ち去ろうとしている夫の所に急ぎ来るよう命じた。
彼女は来た。そして跪いて彼にとどまるよう懇願した。
だが彼はその願いを撥ねつけ、とどまろうとはせず、また彼女を
以前のように喜びの表情で格別見ようとしなかった。

Illa dolet, fletuque fluit, laniatque capillos, 360
 Et secat ungue genas, et humi moriendo volutat.
 Id regina videns affatur taliter illum :
 ‹Haec tua, quae moritur sic pro te, Guendoloena
 Quid faciet? Dabiturne viro? Viduamve manere
 Praecipis aut tecum, quocumque recesseris, ire? 365
 Ibit enim tecumque nemus nemorisque virentes
 Laeta colet saltus, dum te potiatur amante.›
 Vocibus his igitur respondit talia vates :
 ‹Nolo, soror, pecudem, patulo quae fontis hiatu
 Diffundit latices, ut Virginis urna sub aestus ; 370
 Nec curam mutabo meam velut Orpheus olim,
 Quando suos calathos pueris commisit habendos,
 Eurydice stygias postquam transnavit arenas :
 Mundus ab alterutro Veneris sine labe manebo.
 Huic igitur detur nubendi justa facultas, 375
 Arbitrioque suo, quem gestit ducere, ducat.
 Praecaveat tamen ipse sibi qui duxerit illam,
 Obvius ut nunquam mihi sit nec cominus astet,
 Sed se divertat, ne, si mihi congregiendi
 Copia praestatur, vibratum sentiat ensem ; 380
 Cumque dies aderit sollemni lege jugali
 Diversaeque dapes convivis distribuentur,
 Ipsemet interero, donis munitus honestis,
 Ditaboque datam profuse Guendoloenam.›
 Dixerat, atque vale gradiens subjunxit utrique, 385

彼女は悲しみ嘆き、涙を流し、髪をかきむしり、
爪で頬をひっかけ、地に伏して死ななばかりに身悶えた。

王妃はそれを見て、彼にたいしてこう言った。

「夫と頼むあなた故にこれほど苦しんでいるグウェンドロエーナは
どうなるのです。再婚させるのですか。それとも寡婦やいぬのままにいるよう、
あるいは行く所どこへでもついて来るよう命令なさるのですか。

実際彼女はあなたとならついて行き、あなたが愛する夫である限りは、
森であれ、森の中の緑の草地であれ、喜んで一緒に暮すでしょう。」

この言葉にたいして予言者はこう答えた。

「私は、妹よ、まるで暑い盛りのウィルゴーの水道②のように
広い水溜りに涙を注ぎ込んでいるこいつは嫌いだ。

だが、エウリュディケーが冥府よみの沼川を渡った後、
家事の手籠を少年達にまかせたオルペウスのように
私は関心を他に移すこと②はしない。

いずれをも退け、ウェヌスの穢れを去って、清らにしよう。

従って、この女には結婚する正当な権利が与えられよう。

おのれの判断に従って、夫としたい男を夫とするがよい。

ただし、彼女をめとった男は、私に出会ったり、

近づいたり②は決してしないように注意してもらいたい。

もしも顔を合わせるようなことになって

勢い激しい大刀を浴びることのないよう私を避けてほしいのだ。

厳粛な法に則る婚礼の日が来て、

様々な馳走が客に振舞われるそのときには、

私も立派な贈物を持ってそれに加わり、

惜しみなく与えてグウェンドロエーナを富ましめよう。」

そう言うと、歩きながら双方に別れの言葉を告げ、

Et petiit silvas, nullo prohibente, cupitas.
 Guendoloena manet spectans in limine tristis,
 Et regina simul, casuque moventur amici,
 Miranturque nimis rerum secreta furentem
 Nosse virum, veneremque suae scivisse sororis ; 390
 Mentitumque tamen pueri de morte putabant,
 Quam dixit ternam, cum dicere debuit unam :
 Inde diu sua visa fuit vox vana per annos,
 Donec ad aetatem venit puer ille virilem.
 Tum cunctis patefacta fuit multisque probata : 395
 Nam, dum venatum canibus comitantibus iret,
 Aspexit cervum nemoris sub fronde latentem,
 Dissolvitque canes, qui cervo devia viso
 Transcendunt complentque suis latratibus auras ;
 Ipsemet urget equum calcaribus, insequiturque 400
 Nunc cornu, nunc ore monens, operisque ministros
 Increpat, atque jubet cursu citiore venire.
 Mons ibi celsus erat, circumdatus undique saxis,
 Juxta quem fluvius subtus per plana fluebat.
 Hunc fera transcendit, fugiens dum venit in amnem, 405
 Exegitque suas solito de more latebras.
 Instigat juvenis, montem quoque tramite recto
 Praeterit, et cervum per saxa jacentia quaerit.
 Contigit interea, dum duceret impetus, ipsum
 Labi quadrupedem celsa de rupe, virumque 410
 Forte per abruptum montis cecidisse sub amnem,

誰に阻まれることもなく、待望の森を目指した。
グウェンドロエーナは悲しく眺めながら門に立ちつくし、
王妃もまた同じであった。友人達はこの出来事に胸を打たれ、
また狂った男が秘密の事柄を知っており、
妹の情事を知っていたことにひどく驚いていた。
だが彼等も小姓の死については彼が嘘を言ったと考えた。
一つを言うべきときに、三つの死を語ったからであったのだ。
それからも長く、何年もの間、彼の言葉は空言そらごとと見なされていたが、
やがてかの小姓が成年に達した。すると
彼の正しさがすべての人に明らかとなり、多くの人に認められた。
その訳はこうであった。この男は犬をつれて狩りに行き、
葉の繁った森に鹿がひそんでいるのを見つけ、
犬を放った。犬は鹿を見ると道もない所を
踏み越え、吠え声であたりの空気を満した。
彼自身も馬に拍車を入れ、その後から角笛や
言葉で指図しながら追い掛け、召使い達の働きぶりを
罵って、一層疾く走ってついて来るよう命じた。
そこに険しい山があり、四方を岩でとり囲まれ、
そのすぐ下の平地を河が流れていた。
獣はこの山をのぼって、河の方へ向かって逃げ、
いつものように慎重に判断しながら隠れがを求めた。
若者はせき立て、彼もまたその山を一直線に
のぼり、横たわる岩の間を通過して鹿を探した。
するとそのとき、勢の赴くままに、あろうことか
四足獣が高い崖から足を滑らせ、乗り手の彼もまた
はからずも山の絶壁を下の河へと落ちて行った。

Ut tamen haereret pes ejus in arbore quadam
 Et submersa forent sub flumine cetera membra :
 Sicque ruit, mersusque fuit, lignoque pependit,
 Et fecit vatem per terna pericula verum. 415

Qui nemus ingressus fuerat rituque ferino
 Vivebat, patiens concretae frigoris aquae,
 Sub nive, sub pluvia, sub iniquo flamine venti ;
 Idque placebat ei, potius quam jura per urbes
 Exercere suas gentesque domare feroces. 420

Interea, ducente viro labentibus annis
 Cum grege silvestri talem per tempora vitam,
 Guendoloena datur nubendi lege marito.
 Nox erat, et nitidae radiabant cornua lunae,
 Cunctaque convexi splendebant lumina caeli ; 425

Purior aer erat solito : nam frigidus atrox
 Expulerat nubes boreas caelumque serenum
 Reddiderat, sicco detergens nubila flatu.
 Sidereum cursum vates spectabat ab alto
 Monte, loquens tacite sub divo, talia dicens : 430

《Quid sibi vult radius Martis? Regemne peremptum
 Portendit noviter rutilans, aliumque futurum ?
 Sic equidem video : nam Constantinus obivit,
 Ipsiusque nepos scelerata sorte Conanus
 Per patruj jugulum sumpto diademate rex est. 435
 At tu, summa Venus, quae certo limine labens

しかし彼の片足がとある一本の木に引っ掛かり、
体の他の部分は河の水に浸される結果となった。
かくして彼は落ち、水に浸され、木にぶら下がり、
予言者の正しさを三重の証拠によって示したのだった。

予言者は森に分け入り、まるで獣同様に、
堅く固まった水の冷たさに耐えながら、
雪や、雨や、荒々しく吹きすさぶ風の下で暮していた。
こうした生活が、自領の町々に法を行ない
粗暴な民びとを服従させることよりも気に入っていたのだ。
一方、彼がもう何年もの間このような生活を
ずっと森の獣たちと共に送っていたために、
グウェンドロエーナは正式に再婚することになった。
夜であった。月の両端は明かるく輝き、
円い天空に下がるすべての^{ともしび}灯が光を放ち、
空気はいつになく澄んでいた。それも厳しい寒さが
陰鬱な北風を追い出し、乾いた風で雲を払って、
一天澄み渡った空にしていたからであった。
予言者は星の動きを山の高みから
眺めながら、こう一人静かに夜空の下で考えた。
「あの火星^{マールス}の輝きは何を意味するのか。王が死に、
他の者が王とならんことをこの異常な赤らみは示すのか。
確かに私はそのように見る。実際コンスタンティーン^㊸は逝き、
今やその甥にあたるコナーヌ^㊹スが呪われた運命により
叔父君を殺害して王冠を得、王となっている。
しかし、汝、黄道帯の下で定まった道を進みながら

Infra zodiacum solem comitaris euntem,
 Quid tibi cum radio, qui duplex aethera fidit?
 Discidiumne mei sectus portendit amoris?
 Talis enim radius divisos signat amores. 440
 Forsitan absentem me Guendoloena reliquit
 Alteriusque viri gaudens complexibus haeret.
 Sic igitur vincor, sic alter fungitur illa;
 Sic mea jura mihi, dum demoror, eripiuntur;
 Sic equidem: nam segnis amans superatur ab illo 445
 Qui non est segnis nec abest, sed cominus instat.
 At non invideo: nubat nunc omine dextro
 Utaturque novo, me permittente, marito;
 Crastina cumque dies illuxerit, ibo feramque
 Mecum munus ei promissum quando recessi.》 450
 Dixerat, et silvas et saltus circuit omnes,
 Cervorumque greges agmen collegit in unum,
 Et damas capreasque simul, cervoque resedit,
 Et, veniente die, compellens agmina prae se,
 Festinans vadit quo nubit Guendoloena. 455
 Postquam venit eo, patienter stare coegit
 Cervos ante fores, proclamans: 《Guendoloena,
 Guendoloena, veni: te talia munera spectant.》
 Ocius ergo venit subridens Guendoloena,
 Gestarique virum cervo miratur, et illum 460
 Sic parere viro, tantum quoque posse ferarum
 Uniri numerum, quas prae se solus agebat,

太陽の歩みに付き従って行く最高の金星^{ウエヌス}よ、
何故天を引き裂く二つの光が汝に添うているのか。
その切り裂かれた光はわが愛する妻の離別を示すのか。
実際このような光は愛の疎遠を徴すものなのだ。
恐らくは留守の私をグウェンドロエーナは捨てて、
喜んで他の男の抱擁に身をまかせているのだ。
つまりは、かくして私は敗れ、かくして他の男が彼女を得、
かくして私の権利は愚図ついている間に奪われてしまった。
実際かくの如くにしてだ。とかく愚図な恋人は、愚図でもなく、
留守もせず、いつも身近にいる恋人に先を越されてしまうのだ。
だが私は嫉みはしない。今やめでたく式を挙げ、
新たな夫と睦ぶがよい。私もそれを許そう。
あす夜が明けたならば、別れた際に約束した
贈物を彼女のもとに私は持って行こう。」
こう言うと、森や草地を残らず廻って、
群いる鹿を羚羊や野呂鹿などと共に
一つの群にまとめ、一頭の鹿の背にまたがり、
夜が明けると、この群を後から追い立てながら
急ぎグウェンドロエーナの婚礼の場所に向かった。

そこまで来ると、彼は鹿たちを辛抱強く門の前に
立たせて、こう大声で叫んだ。「グウェンドロエーナよ、
グウェンドロエーナ、わしは来たぞ。お前を贈物が待っているぞ。」
それで直ぐに頬笑みながらグウェンドロエーナはやって来て、
彼が鹿の背にまたがり、その鹿が彼にたいしてそんなにも
順従なのに驚き、またこれほどの獣を一つにまとめて、
牧童がいつも牧草地に連れて行く牛をそうするように、

Sicut pastor oves, quas ducere suevit ad herbas.
 Stabat ab excelsa sponsus spectando fenestra,
 In solio mirans equitem, risumque movebat. 465
 Ast, ubi vidit eum vates animoque quis esset
 Calluit, extemplo divulsit cornua cervo,
 Quo gestabatur, vibrataque jecit in illum,
 Et caput illius penitus contrivit, eumque
 Reddidit exanimem, vitamque fugavit in auras. 470
 Ocius inde suum talorum verbere cervum
 Diffugiens egit, silvasque redire paravit.
 Egrediuntur ad haec ex omni parte clientes,
 Et celeri cursu vatem per rura sequuntur.
 Ille quidem velox sic praecurrebat, ut isset 475
 Ad nemus intactus, nisi praevious amnis obsesset.
 Nam, dum torrentem fera prosiliendo mearet,
 Elapsus rapida cecidit Merlinus in unda.
 Circueunt ripas famuli, capiuntque natantem,
 Adducuntque domum, vinctumque dedere sorori. 480

Captus item vates fit tristis, et optat abire
 Ad silvas, pugnatque suos dissolvere nexus,
 Et ridere negat, potumque cibumque refutat,
 Tristitiaque sua tristem facit esse sororem.
 Ergo videns illum Rodarchus pellere cunctam 485
 Laetitiam nec velle dapes libare paratas,
 Educi praecepit eum miseratus in urbem

ただ一人でそれを彼が後から追って来たことに驚いた。
高い窓から花婿は立って外を眺め、馬ならぬ
鹿にうちまたがる地上の騎手を見て笑い声を立てた。
しかし予言者は彼を見て、それが誰であるかを
悟るや、やにわに彼が乗って来た鹿の角を
引き抜き、勢い激しく彼をめがけて投げつけ、
彼の頭をずっと奥まで打ち砕き、彼の息を
途絶えさせ、命を虚空に追い出してしまった。
それから直ぐさま踵きびすの鞭で鹿を駆り立て、
急いで逃げてまた森に戻ろうとした。
しかしこの騒ぎにいたる所から家来達が現れ、
野や畠を越え素早い足で予言者の後を追って来た。
確かに疾く遙か先頭きって走っていた彼は、行手にも
しも河がなければ、無事森に着いていたことだろう。
というのも、獣が飛び込んで河を渡る途中で
メルリーヌはその急な流れの中に転げ落ちてしまったのだ。
召使達は岸を取り巻き、泳ぎ寄る彼を捕え、
館に引っ立て、縛られた姿のまま妹に引き渡した。

虜となった予言者は再び悲しみに沈み、あくまで
森へ行こうとして、縛めを解こうとあらがった。
そして笑うことを拒み、飲み物も食べ物も退け、
その悲しみようは妹をも悲しませた。
それでローダルクスは彼がすべての喜びを捨て、
用意された御馳走も食べようとしなのを見て、
憐れに思い、彼を町の広場の人中に連れ出すよう

Per fora, per populos, ut laetior esset eundo
 Resque videndo novas, quae vendebantur ibidem.
 Ergo vir eductus, dum progredereetur ab aula, 490
 Inspicit ante fores famulum sub paupere cultu,
 Qui servabat eas, poscentem praetereuntes
 Ore tremente viros ad vestes munus emendas ;
 Mox stetit et risit vates miratus egentem.
 Illinc progressus nova calciamenta tenentem 495
 Spectabat juvenem commercantemque tacones :
 Tunc iterum risit renuitque diutius ire
 Per fora, spectandus populis quos inspiciebat ;
 At nemus optabat, quod crebro respiciebat,
 Quo nitebatur vetitos divertere gressus. 500
 Inde domum famuli redeunt, ipsumque cachinnum
 Bis movisse ferunt, silvas quoque velle redire.
 Ocius ergo volens Rodarchus scire quid esset
 Quod portendisset risu, dissolvere nexus
 Illico jussit, ei concedens posse reverti 505
 Ad solitas silvas, si risus exposuisset.
 Laetior assistens respondit talia vates :
 ‹‹Janitor ante fores tenui sub veste sedebat
 Et velut esset inops rogitabat praetereuntes,
 Ut largirentur sibi quo vestes emerentur : 510
 Ipsemet interea subter se denariorum
 Occultos cumulos occultus dives habebat.
 Illud ergo risi : tu terram verte sub ipso,

命令し、そこで売られている珍しい品々を見ることで彼を楽しませようと考えたのだった。

という訳で連れ出された彼は、宮殿の外に出たとき、門の前にみすばらしいなりをした召使を見た。

この召使はこの門の番人で、前を通る人々に口を震わせながら服を買うための喜捨を乞うていた。直ぐに予言者は足を止め、その貧しい男を見て笑った。

それからまた先へ進み、新しい靴を手に持って靴修理の革を買おうとしている若者を見た。

そのとき再び彼は笑い、もうそれ以上広場を歩いて彼が見た人々の見世物に自分なることを拒み、森へ行こうとしてその方を幾度も振り返えり、その方へ足を向けようとしては引き止められた。

それから召使は館に帰り、彼が二度大笑いし、それにまた森に戻ろうとしたことも報告した。それで直ぐにローダルクスはその笑いの表わすものが何であるかを知ろうとして、その場で直ちに縛めを解くよう命令し、笑いの意味を説明してくれるならば、いつもの森に戻ることを許そうと彼に言った。

喜んだ予言者は王の前に立ってこう答えた。

「門の前に貧しい^{みなり}服装の門番が坐り、服を買う金を施してくれるようにと

いかにも困った様子で道行く人々に物乞いしていた。

しかし男はその時、自分の足下に隠された

お金の山を持つ、隠れた分限者だったのだ。

それで私は彼を笑った。彼の足下の土を掘り返せば、

Nummos invenies servatos tempore longo.
 Illinc ulterius versus fora ductus ementem 515
 Calciamenta virum vidi pariterque tacones,
 Ut, postquam dissuta forent usuque forata,
 Illa resartiret primosque pararet ad usus.
 Illud item risi, quoniam nec calciamenti
 Nec superadditis miser ille taconibus uti 520
 Postmodo compos erit, quia jam submersus in undis
 Fluctuat ad ripas. Tu, vade videre: videbis.〉
 Dicta probare viri cupiens, Rodarchus ad amnem
 Circumquaque suos jubet ocius ire clientes,
 Ut, si forte virum per proxima littora talem 525
 Demersum videant, festina voce renarrant.
 Jussa ducis peragunt: nam fluvia circumeuntes
 Submersum juvenem squalentes inter arenas
 Inveniunt, redeuntque domum, regique renarrant.
 At rex interea, forium custode remoto, 530
 Suffodit et vertit terram, reperitque sub ipsa
 Thesaurum positum, vatemque jocosus adorat.

His igitur gestis, vates properabat abire
 Ad solitas silvas, populos exosus in urbe.
 Praecipiebat ei secum regina manere 535
 Optatumque nemus postponere, donec abirent
 Quae tunc instabant candentis frigora brumae
 Atque rediret item teneris cum fructibus aestas,

長い間彼が番をしていたお金が見つかるはずだ。
そこから更に広場の方へ連れて行かれたとき、私は
靴と一緒に靴修理の革を買っている男を見た。
もしも履き古されて孔があいたばあいには
それで繕い、また元通り使おうと考えてのこと。
その男をまた私は笑った。何故ならば、その靴も、
また合わせ買ったその革も、哀れや直ぐに使えなくなる
はずの男であったからで、実際もうすでに彼は水に溺れ、
岸辺に漂っている。行って見れば見られるはずだ。」
彼の言葉を確かめようと考え、ローダルクスは
直ぐに河に行くよう周りの家来に命令し、
もしも万一そのような男が近くの岸辺で
溺れているのを見たならば、急いで報告せよと命じた。
主命を彼等は立派に果した。実際流れに沿って行き、
その若者が汚い泥の中に溺れ死んでいるのを
見つけ、館に帰ってそのことを王に報告した。
しかしまた一方、王は門の番人を遠のかせ、
地面を掘り下げ、掘り返して、その下にあった
財宝を見つけ、喜び浮かれて予言者を拝した。^⑩

かくしてこうした事が終ると、町の人の多さを嫌う
予言者は、住み慣れたいつもの森へ急いで行こうとした。
王妃は彼と一緒にいてくれるよう、そして
好きな森へ行くのは暫くの間猶予して、それは
今続いている白い冬の寒さが行ってしまい、
再び夏が柔らかな木の実と共にめぐって来て、

Unde frui posset, dum tempora sole calerent.
 Ille repugnabat, verbis et talibus illam 540
 Alloquitur, cupiens secedere, frigore spreto:
 ‹O dilecta soror, quid me retinere laboras?
 Non me bruma suis poterit terrere procellis,
 Non gelidus boreas, cum flatu saevit iniquo
 Balantumque greges subita cum grandine laedit, 545
 Non, cum turbat aquas diffusis imbribus, auster,
 Quin nemorum deserta petam saltusque virentes.
 Contentus modico potero perferre pruina:
 Illic arboreis sub frondibus inter olentes
 Herbarum flores aestate jacere juvabit. 550
 Ne tamen esca mihi brumali tempore desit,
 In silvis compone domos, adhibeque clientes,
 Obsequiumque mihi facient, escasque parabunt,
 Cum tellus gramen fructumque negaverit arbor.
 Ante domos alias unam compone remotam, 555
 Cui sex dena decem dabis ostia totque fenestras,
 Per quas ignivomum videam cum Venere Phoebum,
 Inspiciamque polo labentia sidera noctu,
 Quae me de populo regni ventura docebunt.
 Totque notatores, quae dicam scribere docti, 560
 Assint et studeant carmen mandare tabellis.
 Tu quoque saepe veni, soror o dilecta, meamque
 Tunc poteris relevare famem potuque ciboque.›
 Dixit, et ad silvas festinis gressibus ivit.

木の実も食べられ、陽気もよくなってからにするようにと勧めた。

彼はそれに逆らい、このような言葉で彼女に語り掛け、寒さもものは出て行こうとした。

「おお、愛する妹よ、何故私を引き止めようとする。

たとえ冬が疾風^{はやて}で私を脅かそうとも、

また冷たい北風が荒々しく吹きすさび、

突然の雹で羊たちを傷つけようとも、

また南風が雨を降り注いで川を濁らせようとも、

私は人気のない森と緑の草地を求めて止まぬのだ。

僅かなもので満ち足りる私は凍てつく霜にも耐えられよう。

そこでは葉の繁った木の下のかぐわしい香りを放つ

草花の間に、夏、体を横たえることは楽しかろう。

だが、冬の季節に私に食べ物が不足することのないよう、

どうか森に家を建て、それに召使を付けてくれ。

土が草を、木が木の実を与えてくれぬときは、

彼等が私の命に従って食事の用意をしてくれよう。

何はともあれ先ず一軒他からは遠く離れた所に家を建て、

それに七十の戸口と同じ数の窓を付けてくれ。

その窓から私は金星や火を吐く太陽を眺め、

また夜は空を滑って行く星を観察するのだ。

それらは王国内の人々の未来を私に教えてくれよう。

また私の口述を筆記できる同じ数の書記を置き、

私の予言^{メソプレット}を書板に書き写すよう計らってくれ。

お前も、おお、愛する妹よ、度々やって来て、私の

飢えを飲み物や食べ物で癒してくれ。」

そう言うと、急ぎ足で彼は森へ行ってしまった。

Paruit ergo soror ; nam jussam condidit aulam 565
 Atque domos alias et quicquid jusserat illi.
 Ille quidem, dum poma manent Phoebusque per alta
 Altius ascendit, gaudet sub fronde manere
 Ac peragrare nemus, zephiris mulcentibus ornos.
 Cumque veniret hiems rigidis hirsuta procellis, 570
 Quae nemus et terras fructu spoliabat ab omni,
 Deficeretque sibi pluviis instantibus esca,
 Tristis et esuriens dictam veniebat ad aulam :
 Illic multotiens aderat regina dapesque
 Et potum pariter fratri gavisa ferebat, 575
 Qui, postquam variis sese recreaverat escis,
 Mox assurgebat complaudebatque sorori.
 Deinde domum peragrans ad sidera respiciebat,
 Talia dum caneret, quae tunc ventura sciebat :
 ‹O rabiem Britonum, quos copia divitiarum 580
 Usque superveniens ultra quam debeat effert !
 Nolunt pace frui ; stimulis agitantur herinis ;
 Civiles acies cognataque proelia miscent ;
 Ecclesias Domini patiuntur habere ruinam,
 Pontificesque sacros ad regna remota repellunt ; 585
 Cornubiensis apri conturbant quaeque nepotes ;
 Insidias sibimet ponentes ense nefando
 Interimunt sese, nec regno jure potiri
 Expectare volunt, regni diademate raptio.
 Illic quartus erit, crudelior asperiorque. 590

ところで兄の言葉に妹は従った。実際命じられた館やその他の家も建て、彼が彼女に命じたすべてを果したのだ。だが彼は、まだ果物もあり、太陽が空をより高く登って行く間は、喜んで繁り葉の下にとどまり、西風にななかまどのそよぐ森をさまよっていた。しかし烈しい嵐に髪を逆立てた冬がやって来て、森や大地からすべての恵みを奪い取り、降り続く雨に食糧がなくなってしまうと、悲しげに腹を空かせてこの館にやって来た。そこを幾度も王妃は訪れ、御馳走やそれにまた飲み物も喜んで兄のために運んだ。彼はさまざまな食べ物で元気を取り戻すと、直ぐに立ち上がって互いに妹と賞讃の言葉を交し合った。それから家の中を歩きまわって星を眺め、その時知った未来の事柄をこう予言した。

「程を越えて絶えず増え行く多くの富に^③傲り高ぶるブリトン人の、おお、何たる狂気よ！彼等は平和を楽しもうとはせず、復讐心に駆り立てられ、内乱を起こし、同族間で戦い合い、主の聖堂は崩れ行くにまかせ、神聖な司教達を遠い国々に追い払っている。コルヌビア^④の猪の子孫達はすべてを混乱させ、互いに待伏せしては邪剣を揮って互いに殺し合い、それにまた王冠を奪われていても王国を正当にわがものとしようとはしない。そこに一層残忍狂暴な第四の者が現われるであろう。

Hinc Lupus aequoreus debellans vincet et ultra
Sabrinam victum per barbara regna fugabit.

Idem Kaerkeri circumdabit obsidione

Passeribusque domos et moenia trudet ad imum.

Classe petet Gallos, sed telo regis obibit. 595

Rodarchus moritur, postquam discordia longa

Scotos et Cumbros per longum tempus habebit,

Donec crescenti tribuatur Cumbria genti.

Cambri Gewissos, post illos Cornubienses

Afficient bello, nec eos lex ulla domabit. 600

Kambria gaudebit suffuso sanguine semper :

Gens inimica Deo, quid gaudes sanguine fuso ?

Kambria compellet fratres committere pugnas

Et damnare suos scelerata morte nepotes.

Scotorum cunei trans Humbrum saepius ibunt 605

Obstantesque viros periment pietate remota ;

Non impune tamen : nam caeus ductor obibit ;

Nomen habebit equi qui fiet saevus in illo,

Finibus ex nostris heres expulsus abibit.

Scote, reconde tuos, quos nudas, ocus enses : 610

Vis tibi dispar erit nostra cum gente feroci.

Corruet urbs Acelud, nec eam reparabit in aevum

Rex aliquis, donec subdatur Scottus duello.

Urbs Sigeni et tures et magna palatia plangunt

Diruta, donec eant ad pristina praedia Cambri. 615

Kaerperis in portu sua moenia rupta videbit,

この者を海の狼が戦いにおいて打ち負かし、敗れた者をサプリーナ河^⑧のかなたの野蛮な国々に追い払うであろう。またカエルケリー^⑨の町を取り巻く包囲陣をしき、雀によって家々や城壁を地に突き倒してしまうであろう。艦隊を率いてガリアを攻め、王の槍に倒れるであろう。

ローダルクスはスコット人とクンプリア人との間に長い不和が長い期間続いたあげくに死に、クンプリアは勢力を得た種族に与えられるであろう。クンプリア人^⑩はゲウィッシー族^⑪を、ついでコルヌビアの人々を戦いで苦しめ、いかなる法も彼等を抑えはしないであろう。クンプリアは常に流血を喜ぶことであろう。神に敵する民びとよ、何故汝等は流血を喜ぶのか。クンプリアは、兄弟同志が相争い、それ故彼等の子孫におぞましい人殺しの罰を負わせるよう強いるであろう。

スコット人の軍隊は屢々フンベル河を渡り、抵抗する人々を情容赦もなく打ち殺すであろう。だがそれも無事には済むまい。指揮者は斬り殺されるのだ。その折に勇猛振りを示す者は“馬”なる名を持ち、またその後継ぎはわれらが国から追放されよう。スコット人よ、汝の抜いた剣を疾く鞘に戻すがいい。荒々しいわれらが力に汝は耐えられはしないのだ。

アケルッド^⑫の町は崩壊し、スコット人が戦いに敗れるまではいかなる王もこれを再建することは決してないであろう。

シゲニー^⑬の町は塔も大いなる館も打ち壊され、クンプリア人が昔の領地に戻るまでは嘆いていよう。カエルペリス^⑭は狐の歯持てる者が再建するまでは

Donec eam locuples cum vulpis dente reformet.

Urbs Loel spoliata suo pastore vacabit,

Donec reddat ei cambutam virga Leonis.

Urbs Rutupi portus in littora strata jacebit ;

620

Restaurabit eam galeata nave Rutenus.

Moenia Meneviae reparabit quintus ab illo,

Per quem palla sibi reddetur dempta per annos ;

Inque tuo, Sabrina, sinu cadet Urbs Legionum

Amittetque suos cives per tempora longa :

625

Hos sibi reddet item, cum venerit ursus in agno.

Saxonici reges expulsis civibus urbes,

Rura, domosque simul per tempora longa tenebunt.

Ex his gestabunt ter tres diadema dracones ;

Ducenti monachi perimentur in urbe Leyri

630

Et, duce depulso, vacuabit moenia Saxo.

Qui prior ex Anglis erit in diademate Bruti

Restaurabit item vacuatam caedibus urbem.

Gens fera per patriam prohibebit chrisma sacrare

Inque Dei domibus ponet simulacra deorum.

635

Postmodo Roma Deum reddet, mediante cuculla,

Rorabitque domos sacro sacer imbre sacerdos,

Quas renovabit item pastoribus intro locatis.

Legis divinae servabunt jussa subinde,

Plures ex illis et caelo jure fruentur.

640

Id violabit item gens impia plena veneno

Miscebitque simul violenter fasque nefasque ;

港に打ち破られた城壁を見ていることだろう。

ローエルの町^④は獅子の王笏がそれに牧杖を取り返すまでは牧者を奪われ無人のままになっていよう。

港町ルツピー^⑤は岸边に平たく横たわるであろう。
それをルテーニー人が砲を被った船で再建するであろう。

メーネウァ^⑥の城壁は彼から数えて五番目の者が修復し、何年も奪われていた祭服が彼の手によって取り戻され、サブリーナよ、汝がその胸に抱く軍団の町^⑦は倒れ、長い期間に亘って住民を失っていることだろう。だが、熊が小羊の姿でやって来た折に、再び彼等を取り戻そう。

サクソン人の王達は住民を追い出し、町々を田畠や家と共に長い期間に亘ってわがものにしていよう。これらの者の内三に三倍する龍が王冠を戴くであろう。レイーラー^⑧の町では二百人の修道僧が殺され、サクソン人が指導者を追い出し、城内を空にするであろう。アングル人の内第一番にブルトッス^⑨の王冠を得る者が殺戮によって空になったこの町を再び建て直すであろう。

この野蛮な種族はわが祖国に塗油の礼を禁じ、主^{すまい}の住居に異教の神々の偶像を置くであろう。その後、ローマは頭布を媒にして主を取り戻し、聖なる司祭^{すまい}が聖なる水でその住居を潤し、牧者を内に置いて活気あるものにしよう。直ぐに人々は神聖な法の命ずるところに従い、その多くは当然に天国の幸せをも得るであろう。

害毒に満ちた不敬な族^{うから}は再度それらを冒瀆し、正と不正とを乱暴にも一緒くたにして、

Vendet in extremos fines trans aequora natos
Cognatosque iramque Tonantis inibit.

O scelus infandum! Quem Conditor orbis honore 645
Caeli dignatus cum libertate creavit,
Illum more bovis vendi ducique ligatum!

Cessabis, miserande Deo, qui proditor olim
In dominum fueras, cum primum regna subisti.
Classe supervenient Daci, populoque subacto 650
Regnabunt breviter, propulsatique redibunt.
His duo jura dabunt, quos laedet acumine caudae
Foederis oblitus pro sceptri stemate serpens.

Indeque Neustrenses ligno trans aequora vecti,
Vultus ante suos et vultus retro ferentes, 655
Ferratis tunicis et acutis ensibus Anglos
Acriter invadent, periment, campoque fruentur.

Plurima regna sibi submittent atque domabunt
Externas gentes per tempora, donec Erinus
Circumquaque volans virus diffundet in ipsos. 660

Tum pax atque fides et virtus omnis abibit,
Undique per patrias committent proelia cives,
Virque virum prodet; non invenietur amicus;
Conjuge despecta, meretrices sponsus adibit
Sponsaque, cui cupiet, despecto conjuge, nubet. 665

Non honor ecclesiis servabitur, ordo peribit;
Pontifices tunc arma ferent, tunc castra sequentur,
In tellure sacra tunc et moenia ponent,

海を越えた遠くの国々に息子や縁者達を
 売りとばし、^{いかづち}雷の神の怒りをかうであろう。
 おお、言語道断の悪業よ！ 天の榮譽に値した
 地の創造者が自ら自由意志で創り給うた者が
 牛の如くに売られ、繩に繋がれ引っ立てられて行くとは！
 神に憐れまるべき者よ、最初王国を攻めたときに
 すでに一度神の裏切者となった汝よ、よすがいい。
 艦隊をもってデー人^④が襲来し、人々を服従させて
 暫くの間支配者となり、また追い出されて戻って行くであろう。
 二人がこれらの者に法を布くであろうが、王笏の貴さ故に
 協約を忘れた蛇が尻尾の先で彼等を打つであろう。
 またその後、船で海を渡って来る
 前と後とに顔を持つネウストリア^④人が、
 鉄の帷子^{かたびら}に身を包み、鋭い剣を揮ってアングル人を
 烈しく攻め、全滅させ、戦いの勝利を得るであろう。
 数多くの王国を服従させ、暫くは異国の民びとを
 抑えていようが、やがて復讐の女神が
 いたる処飛びまわって彼等に害毒をふり撒こう。
 そのときは平和も信義も、また美德もすべて消え去り、
 いたる処市民は自国内で争い合うことであろう。
 人は人を裏切り、友人とては見当たらず、
 配偶者を蔑ろにして花婿は娼婦の許に赴き、
 また花嫁は配偶者を侮って自ら求める男と契り合おう。
 名誉が教会に守られず、秩序は消え失せ、
 司教達はあるときは武器を執り、あるときは軍団の行軍に従い、
 あるときは神聖な土地に城壁さえも築き、

Militibusque dabunt quod deberetur egenis ;
 Divitiis rapti mundano tramite current, 670
 Eripientque Deo quod sacra tyara vetabit.

Tres diadema ferent, post quos favor ille novorum
 Quartus erit sceptris, pietas cui laeva nocebit,
 Donec sit genitore suo vestitus, ut apri
 Dentibus accinctus galeati transeat umbram. 675

Quatuor ungentur vice, versa summa petentes
 Et duo succedent, qui sic diadema rotabunt,
 Ut moveant Gallos in se fera bella movere.

Sextus Hibernenses et eorum moenia vertet :
 Qui pius et prudens populos renovabit et urbes. 680

Haec Vortigerno cecini prolixius olim
 Exponendo duum sibi mystica bella draconum,
 In ripa stagni quando consedimus hausti.
 At tu, vade domum morientem visere regem,
 O dilecta soror, Thelgesinoque venire 685
 Praecipe : namque loqui desidero plurima secum.
 Venit enim noviter de partibus Armoricanis,
 Dulcia quo didicit sapientis dogmata Gildae.》

It Ganieda domum, Thelgesinumque reversum,
 Defunctumque ducem reperit, tristesque clientes. 690
 Ergo fluens lacrimis, collabatur inter amicos,
 Et laniat crines, et profert talia dicens :

《Funera Rodarchi, mulieres, plangite mecum,

貧しい者に与えらるべきものを兵士らに与え、
財産を奪われて世俗の道进行、
神聖な司教冠の禁ずるものを神の手から奪い取ろう。

三人の者が王冠をかぶり、その後新来者らの気に入りが
四番目に王位に即き、その愚かな不敬さが禍するであろうが、
やがて父にならってみなりを改め、猪の牙を腰に帯びて
兜かぶりし者の霊を更に高く越えることになるであろう。

最高を求めたこの四人は順序を逆さまにして油塗られ、
その後更に二人が続き、その王冠のまわしようが
ガリア人を刺戟して恐ろしい戦いを自ら招くことになろう。

この六番目の者はヒベルニア人とその町々の城壁を覆し、
敬虔かつ賢明な彼は人と町とを新たなものにしよう。

私はかつて汲み干された池の岸に共に坐って
これらの事柄を更に詳しくウォルティージェルヌスに語り、
二匹の龍どうしの戦いの謎を説き明かした。
しかしお前は館に帰っていまはのきわにある王に付き添い、
おお、愛する妹よ、それからテルゲーシーヌスに来るよう
言ってくれ。私は彼と多くの事を語り合いたい。
実際彼は賢者ギルダスの甘美な教を学んで
アルモリカの地から最近帰ったばかりのはずだ。」

ガニエーダは館に戻り、帰国しているテルゲーシーヌスと
すでに事切れた夫、それにまた悲しんでいる家来達を見た。
それ故涙にかき暮れながら友人達の間で崩れるように倒れ伏し、
髪をかきむしってこのように言った。

「ローダルクスの死を、ご婦人方よ、私と共に嘆き、

Ac deflete virum, qualem non protulit orbis
 Hactenus in nostro, quantum discernimus, aevo. 695
 Pacis amator erat; populo nam jura feroci
 Sic dabat, ut nulli jus inferretur ab ullo.
 Tractabat sanctum justo moderamine clerum,
 Jure regi populo summos humilesque sinebat.
 Largus erat, nam multa dabat: vix quid retinebat. 700
 Omnibus omnis erat faciens quodcumque decebat.
 Flos equitum, regumque decor, regnique columna,
 Heu mihi! qui fueras, inopinis vermibus esca
 Nunc datus es corpusque tuum putrescit in urna.
 Siccine cubile tibi post serica pulchra paratur? 705
 Siccine sub gelido caro candida, regia membra
 Condentur saxo, nec eris nisi pulvis et ossa?
 Sic equidem: nam sors hominum miseranda per aevum
 Ducitur, ut nequeant ad pristina jura reduci.
 Ergo nihil prodest pereuntis gloria mundi, 710
 Quae fugit atque redit, fallit laeditque potentes.
 Melle suo delinit apes quod postmodo pungit:
 Sic, quos demulsit, divertens gloria mundi
 Fallit et ingratae collidit verberare caudae.
 Fit breve quod praestat; quod habet durable non est; 715
 More fluentis aquae transit quodcumque ministrat.
 Quid rosa si rutilet, si candida lilia vernent,
 Si sit pulcher homo, vel equus, vel cetera plura?
 Ista Creatori, non mundo sunt referenda.

私達の知る限りでは、当代今に至るまで、この世には
並ぶ者のなかったわが夫の死を悼んで下さい。
彼は平和の愛好者で、実際狂暴な民びとに法を布き、
人は皆誰の権利も決して誰からも侵されぬようにしたのです。
神聖な聖職者を遇するには適切妥当な指導力をもってし、
王の權威において人々に高き者と低き者とを定めました。
気前もよく、多くを与え、殆ど何一つわがものとはせず、
為すべきは全て為し、彼の全ては全ての人の為にあったのです。
騎士の華、王の誉れ、王国の柱であったそのあなたが、
ああ、悲しいかな、はからずも蛆虫にその餌食として
今は与えられ、あなたのお体は墓の中で朽ちて行く。
目もあやな絹の王床の後でこのような臥床がととのえられ、
雪の肌^{はだえ}が、王者然たる体軀が、このような冷い岩の下に葬られて、
あなたはただ塵と骨だけになってしまわれるのでしょうか。
確かにそうなのです。人間の憐れむべき宿命は永久に
人間がまた元の地位に戻ることをできなくしているのですから。
それ故、変幻自在で、力ある者を惑わし、害をなす
この世の名誉など死に行く者には何の役にも立ちません。
蜜蜂が蜜を塗っておいて、その後そこを剣で刺す、
それと同じで、この世の名誉は愛撫した者を一転して
裏切り、おぞましい尻尾の鞭で打ちのめすのです。
優れたものは儂く、持物で長続きするものはなく、
流れる水の如く役立つものも皆消え去って行く。
たとえ薔薇が赤らもうと、百合が白い花を咲かせようと、
人が、馬が、その他の諸々が美しかろうと、何になりましょう。
これも創造主の計いで、この世ではどうしようもないのです。

Felices igitur qui perstant corde piato, 720

Obsequiumque Deo faciunt, mundumque relinquunt!

Illis perpetuo fungi concedet honore

Qui sine fine regit Christus, qui cuncta creavit.

Vos igitur, proceres, vos, moenia celsa laresque,

Vos, nati dulces, mundanaque cuncta relinquo, 725

Et cum fratre meo silvas habitabo, Deumque

Laeta mente colam nigri cum tegmine pepli.》

Haec ait, atque suo persolvit justa marito,

Signavitque suam cum tali carmine tumbam:

《Rodarchus largus, quo largior alter in orbe 730

Non erat, hic modica magnus requiescit in urna.》

それ故、常に心を清らかに保ち、神に従順で、
 この世を捨てる者こそ本当に幸せです！
 このような者にこそ、終りのない支配者、すべての創造主たる
 キリスト様は、永遠の名誉に与ることをお許しになる。
 それ故、位貴き方々よ、聳え立つ城壁よ、家々よ、
 いとしいわが息子達よ、私はこの世のすべてを捨てて
 兄上と共に森に住み、黒い衣に身を包んで
 神に喜びの心をもって祈りを捧げるつもりです。^①」
 こう言って、夫のために礼を尽した葬儀を行ない、
 その墓石に次ぎのような碑文を刻んだ。
 “この世にまたとなく寛大なりしローダルクス
 かの大いなる王此処小さき壺に憩えり”

註

- ① 狂気 (rabies) 一般的な精神錯乱のほか、特に、ギリシャ語の *μανία* (mania) 同様、神の靈感におそわれた予言者の示す、一種狂的な神憑りの状態をいう。 *furiae* (l. 72; 208), *furor* (l. 208) も同様に考えてよい。また、古代では予言は韻文でなされるのが普通で、そのため「予言」、「予言する」の意味で、*musa*「歌」（ただしここでは「予言」と訳した）、*cano*「歌う」（l. 589）が用いられている。
- ② ロベルトゥス (Robertus) Robert de Chesney, Bishop of Lincoln (在任 1148—66)。この就任の年から推して、この詩が大体1150年頃のものと考えられるわけである。また、1.7の「前任者」とは Alexander, Bishop of Lincoln (在任 1123—48) のことで、ジェフリーは *Prophetiae Merlini* ではこの司教を賞め称えている。
- ③ リンコルニア (Lincolnia) リンカーン (Lincoln)。ローマ占領時代のラテン名は Lindum (Colonia) であった。
- ④ オルペウス…ラビーリウス 詩人および音楽家の始祖的存在である伝説的なオルペウスは別として、カメリーヌス、マケル (Aemilius Macer)、マリウス (Marius Maximus)、ラビーリウス (Gaius Rabirius) の四人は、トロ

イ戦争やローマ皇帝アウグストゥスの戦勝などをうたった、ローマ帝政初期のラテン詩人。残されたものが殆どなく、詳細は明らかでない。ただ、いずれも叙事詩を作っていることと、皆オウィディウス（Ovidius）と同時代の人々で、彼の *Ex Ponto*（『黒海よりの手紙』）IV. xvi にすべてその名が挙げられていて、‘*magnique Rabirius oris*’ はそのままのかたちでそこに (1. 5) に見出されることが注目される。

- ⑤ **デーメーティア** (Demetia) 南ウェールズ。ウェールズ語では Dyfed。
- ⑥ **ウェネドーティア** (Venedotia) 北ウェールズ。ウェールズ語では Gwynedd。
- ⑦ **ペレドゥールス** (Peredurus) ウェールズの騎士物語 *Peredur* の主人公。したがって実在性は不明。Chrétien de Troyes の *Perceval*（英語では Percival）にあたる。このウエ・仏の時代的前後関係については議論のあるところである。
- ⑧ **スコーティア** (Scotia) アイルランドから渡って行ったスコット人が占めていた地域。スコットランドの高地地方にあたる。彼等は絶えず南下して、ブリトン人と対立した。
- ⑨ **グウェンノロウス** (Guennolous) ウェールズ名は Gwenddolau。註⑩参照。
- ⑩ **ab bellum ad bellum** の意に解する。
- ⑪ **クンプリア** (Cumbria) スコットランド南西部 Strathclyde にあったブリトン人の王国。後出カンブリア (Cambria) とは同語源の語で、「同胞（つまり、ウェールズ人）の国」を意味する (cf. Cumberland)。註⑩参照。
- ⑫ **ローダルクス** (Rodarcus) ウェールズ名は Rhydderch Hael。居城は現在の Dumbarton (<Gael. Dun Breatann「ブリトン人の城砦」) にあった。ウェールズの伝説によれば、Arfderydd の支配者 Gwenddolau とこの Rhydderch が、つまりブリトン人同志で、[紀元 573 年に] 戦いを交えた時、Myrddin は前者の家臣として従軍し、戦いに敗れたために狂気を発し、Coed Celyddon (註⑩参照) に逃げ込んだというふうになっている。
- ⑬ 悲しみの旧約聖書の表現。例えば「ヨブ記」i. 20; ii. 12 を参照。
- ⑭ ブリトン人は、五世紀初頭の St. Ninian of Whithorn 以下の熱心な布教活動によって、五世紀から八世紀までの間にキリスト教化されていた。これに対し、侵入者アングロ・サクソン人は、後に見られる通り、まだ異教徒としてここでは扱われている。
- ⑮ ウェールズの写本に残る詩 *Afallenau*（『林檎の木』）では、Myrddin が森の

林檎の木に語り掛けて身の窮状を嘆いている様子が述べられている。

- ⑩ *Afallenau* (註⑨参照) と同様に *Myrddin* をうたった詩 *Qianau* (『挨拶』) では、一匹の子豚が *Myrddin* の森の中での唯一の友となっている。
- ⑪ *ガニエーダ* (*Ganieda*) ウェールズ語では *Gwenddydd*。
- ⑫ *カリドーンの森* (*nemus Calidonis*) ウェールズ語では *Coed Celyddon* (註⑨参照)。正確な位置は不明であるが、あるいはカレドニア (*Caledonia*, または *Calidonia*)、つまり、スコットランドの森という一般的な意味かともいわれる。
- ⑬ *montesque quoque* -*tesque quoque* では長短短短となって、この一脚はヘクサメターの格に合わない。*montes quoque*, あるいは *montesque et* とすることもできようか。
- ⑭ 以下164行まで‘*O utinam*’ (= *O I wish*) に続く一文であるが、156行以下の訳は原文をややはずれたものにしてある。
- ⑮ *グウェンドロエーナ* (*Guendoloena*) ウェールズ語では *Gwendolen*。
(*g*)*wen* (男性形は *gwyn*) は「白い」(*white*) を意味する。174行の *candore* (= *in whiteness, in brilliance*) と呼応する。
- ⑯ *ワリアエ* (*Waliae*) ウェールズ (*Wales*)。
- ⑰ *水蠟の花弁* (*folium ligustri*) *folium* は「花弁」の意に解した。またオウィディウスの *Metamorphoses* (『転身譚』) XIII. 789 に ‘*Candidior folio nivei Galatea ligustri*’ (雪のような水蠟の花弁よりも白く輝いたガラテアよ) という同様な表現が見られる。
- ⑱ ディードー、ピュルリス、プリセイイスの嘆きぶりは、いずれもオウィディウスの有名な *Heroides* (『ヘーローイデース』) に感動的に描かれている。
- ⑲ *シゲーニー* (*Sigeni*) ラテン名を *Segontium* といったウェールズの *Caer Seint* (英語名 *Caernarvon*)、あるいは、ウェールズ詩 *Edmyg Dinbych* (『テンビー礼讃』) に出る、*Conwy* の近くの *Caer Seon* がそれと関係があるようにも思えるが、明確でない。
- ⑳ *グウィエランドゥス* (*Guielandus*) ケルト系の名と思われるが、ゲルマン系だとすれば *Wieland* (*Weland*) か。
- ㉑ *abortis* あるいは54行と同様に、*obortis* とするのが正しいかとも思うが、訳は原文に従った。
- ㉒ *ウィルゴーの水道* (*Virginis urna*) *Virgo* または *Aqua Virgo* のことで、*アグリッパ* (*Marcus Vipsanius Agrippa*) が紀元前19年にローマに引いた水道 (*aqueduct*)。この名は、ある一人の乙女 (*virgo*) がその水源を見

つけたことによるといわれる。公共浴場に給水する他、夏には水泳が楽しめる程の広い池をつくっていたようである。また、オウィディウスの *Ars Amatoria* (『恋愛術』) III. 385-88 から判断すると、この *Virginis* は *aestus* にもかかり、敷衍すれば、「太陽が処女宮 (*Virgo*) に入る夏の炎天下のウィルゴの水道」ということになる。

- ⑳ これは、オルペウスが、愛妻エウリュディケーの死後、一説には男色を好んで、女性にまったく関心を示さなかったため、トラキアの女達はその冷淡さに怒ってバッカスの祭の際に彼を襲い、ずたずたに引き裂いた彼の体をヘブルス河に投げ込んだという伝説に言及したもの。
- ㉑ **コンスタンティヌス** (*Constantinus*) ウェールズ語では *Custenhin*。ブリトン王。ローマ軍撤退後もローマ文明の持つプレスティッジは高く、支配者達は屢々ローマ風の名前を持っている。
- ㉒ **コナーヌス** (*Conanus*) ウェールズ語では *Cynan*。
- ㉓ 254 行以下に展開した、ガニエーダの髪に付いた木の葉、同一人の死についての三つの予言、また貧しい門番と靴を買う若者に関する、愉快的、興味あるエピソード (cf. l. 1: 'musamque jocosam') のソースと類話については、Lewis Thorpe: "Merlin's Sardonic Laughter," *Studies in Medieval Literature and Language in Memory of Frederick Whitehead* (ed. by W. Rothwell et al.: Manchester University Press, 1973), 323-39 を参照。
- ㉔ 以下 680 行までの予言は、大体 *Historia Regum Britanniae* の chap. 112-14 (Faral, pp. 191-94)、つまり、*Prophetiae Merlini* の最初の部分に相当する。
- ㉕ **コルヌビア** (*Cornubia*) コーンウォール (*Cornwall*)。
- ㉖ **サブリーナ** (*Sabrina*) セヴァーン河 (*the Severn*)。
- ㉗ **カエルケリー** (*Kaerkeri*) ラテン名を *Corinium* といった現在の *Cirencester* のことかとも思われるが、不明。なお、町の名前に多く残る *kaer* (*caer*), *caster*, *cester*, *chester* は、いずれもラテン語の *castrum* (=fort) に由来し、かつてローマ軍の城砦のあった場所であることを示している。
- ㉘ **カンブリア** (*Cambria*) ウェールズ (*Wales*)。ウェールズ語では *Cymru*。註①参照。
- ㉙ **ゲウィッシー族** (*Gewissi*) ウェールズの南東部にいた種族の名。
- ㉚ **アケルッド** (*Acelud*) *Historia Regum Britanniae* では *Alclud* その他の名で出て来るダンバートン (*Dumbarton*) のこと。註②参照。
- ㉛ **シゲニー** (*Sigeni*) *Sigēni*, *Sigēni* (l. 235) と母音の長短が異なっているが、同一の町と思われる。註③参照。

- ④① カエルペリス (Kaerperis) ポートチェスター (Portchester)。
- ④② ローエル (Loel) カーライル (Carlisle)。ラテン名は *Luguvalium*。
- ④③ ルツビー (Rutupi) リッチバラ (Richborough)。本来のラテン名は *Rutupiae*。
- ④④ ルテーニー人 (Rutenus) ルテーニーはガリアの種族の名。
- ④⑤ メーネウィア (Menevia) ウェールズ名 *Mynyw* (英語名は *St. David's*)。
- ④⑥ 軍団の町 (Urbs Legionum) カーレオン (Carleon)。かつてローマ軍の軍団 (*legio*) の宿营地であったことによる。ラテン名は *Isca*。
- ④⑦ レイリー (Leyri) レスター (Leicester)。ラテン名は *Ratae*。
- ④⑧ ブルートゥス (Brutus) 伝説的な初代ブリトン王。したがって「ブルートゥスの王冠」とは「ブリトン王の王位」を意味する。
- ④⑨ ネウストリア (Neustria) フランスのノルマンディ (Normandy)。
- ④⑩ **Vice, versa** このコマは不要。
- ④⑪ ヒベルニア (Hibernia) アイルランド (Ireland)。
- ④⑫ ウォルティージェルヌス (Vortigernus) ブリトン王 *Vortigern*。
- ④⑬ *Historia Regum Britanniae* 中の *Prophetiae Merlini* にあたる部分 (Faral, pp. 186-203) を参照。
- ④⑭ テルゲーシーヌス (Thelgesinus, l. 733 では *Telgesinus*) *Taliesin* のこと。このタリエシンは元々六世紀に実在したウェールズの宮廷詩人 (*bard*) であったが、後に伝説化され、*Hanes Taliesin* (『タリエシ物語』) に、*Prophetiae Merlini* に見るメルリーヌスと共通した、超自然的な能力を持つ人間として、その出生の事情や神童ぶりが描かれている。
- ④⑮ ギルダス (Gildas) 賢者ギルダスと称される六世紀の史家で聖人。ブリトン人。*De Excidio et Conquestu Britanniae* (『ブリタニア滅亡史』) を著わした。ウェールズやアイルランドにも滞在したことがある他、晩年はフランスのブルターニュですごしたとされている。
- ④⑯ アルモニカ (Armonica) フランスのブルターニュ (*Brittany*)。この地方には、アングロ・サクソン族の攻勢がいよいよ激しくなった五世紀の半ばから七世紀の初めにかけて多数のブリトン人が移住した。
- ④⑰ ここには、ウェールズの文学において詩人達が古来君主の備えるべきものとして奨揚する、戦いにおける勇敢さや峻烈さ、平時における寛大さ、寛容さなどの美德にたいする、キリスト教的アンチテーゼが見られる。